

早稲田大学審査学位論文

博士（スポーツ科学）

民間テニスクラブのスクール生に対する
競技会参加および競技観戦プログラムが与える影響
ークラブマネジメントへの活用可能性の観点からー

The Effects of Competition and Spectating
on Members of a Tennis School:
Implications for Club Management

2014年1月

早稲田大学大学院 スポーツ科学研究科

霜島 広樹

SIMOZIMA, Hiroki

研究指導教員： リー・トンプソン 教授

目次

第1章 研究の動機、および目的	1
1.1 日本におけるテニス実施の現状	1
1.2 学術的背景と研究目的	2
1.2.1 民間スポーツクラブにおけるマネジメントの先行研究	2
1.2.2 スポーツ参加への意欲や頻度を高めうるプログラム	3
1.2.3 先行研究の課題と研究目的	6
第2章 競技会参加が与える影響	8
2.1 研究方法（研究1）.	8
2.1.1 競技会の選定	8
2.1.2 調査概要（研究1）.	8
2.1.3 従属変数の設定（研究1）.	10
2.1.4 質問紙の構成	12
2.1.5 分析方法（研究1）.	15
2.2 結果（研究1）.	16
2.2.1 サンプルの基本的属性と従属変数の平均値	16
2.2.2 テニス参加動機の変化	17
2.2.3 継続意図の変化	19
2.2.4 観戦意図の変化	20

2. 2. 5	参加頻度の変化	20
2. 3	考察（研究1）	22
2. 3. 1	競技会参加による参加動機の変化について	22
2. 3. 2	競技会参加による継続意図の変化について	23
2. 3. 3	競技会参加による観戦意図の変化について	24
2. 3. 4	競技会参加による参加頻度の変化について	25
2. 4	結論（研究1）	26
第3章	競技観戦が与える影響	28
3. 1	研究方法（研究2）	28
3. 1. 1	観戦プログラムの選定	28
3. 1. 2	研究2のフレームワーク	29
3. 2	研究2-1	30
3. 2. 1	調査方法と結果（研究2-1）	30
3. 2. 1. 1	調査対象の選定とエキシビの概要	30
3. 2. 1. 2	インタビュー調査の方法	32
3. 2. 1. 3	倫理的配慮	32
3. 2. 1. 4	分析方法（研究2-1）	32
3. 2. 2	分析結果（研究2-1）	33
3. 2. 3	考察（研究2-1）	34
3. 3	研究2-2	36

3. 3. 1	調査方法	36
3. 3. 2	従属変数の設定 (研究2-2)	38
3. 3. 3	質問項目 (研究2-2)	40
3. 3. 3. 1	「テニスコミットメント」	40
3. 3. 3. 2	「あこがれ」	40
3. 3. 3. 3	「テニスに対する態度」	41
3. 3. 4	分析結果 (研究2-2)	42
3. 3. 4. 1	サンプルの基本的属性	42
3. 3. 4. 2	尺度の信頼性	43
3. 3. 4. 3	分散分析による観戦前後の差の検定	44
3. 3. 5	考察 (研究2-2)	49
3. 4	結論 (研究2)	52
第4章	総合論議	53
4. 1	クラブマネジメントへのインプリケーション	53
4. 2	本研究の学術的な成果	55
4. 3	研究の限界と今後の課題	58
4. 3. 1	研究の限界	58
4. 3. 2	今後の課題	60
注		59
参考文献		61

第1章 研究の動機、および目的

1. 1 日本におけるテニス実施の現状

テニスは、老若男女の区別なく一緒に楽しめるスポーツとして、多くの実施者がいるスポーツである(日本体育施設協会, 2004)。笹川スポーツ財団による調査によると、テニスの年1回以上の種目別運動・スポーツ実施人口は701万人となっており、テニスはスポーツにおける他の種目と比較しても、かなり多くの実施人口を持っていることが明らかとなっている(笹川スポーツ財団, 2011)。しかし、日本テニス協会が実施したテニス人口等環境実態調査報告書(2013)によると、日本のテニス実施人口は、ここ10年間において長期的な減少傾向にあることが指摘されている。今後のテニスの普及、発展を目指す上で、テニス実施人口の減少を食い止めるための方策を検討することは急務であると言えよう。

テニス人口等実態調査報告書(2013)によると、日本におけるテニス実施環境においては、民間テニスクラブが、実施における大きな割合を占めており、テニス実施の受け皿として民間テニスクラブの存在は重要であると考えられる。よって、テニス実施人口の拡大を考える上で、民間テニスクラブに焦点を当てていくことが有効になると言えよう。しかしながら、日本における民間テニスクラブの数は、2010年において1271とかなり多く存在しているものの、民間テニスクラブの数は、1996年には2194であったのに対し、2002年には1689、2008年には屋外が1349とテニス人口同様に長期的な減少傾向にある(テニス人口等実態調査報告書, 2013)。こういった事実からも、民間テニス事業者にとって、テニスクラブのマネジメントが困難になってきていることが窺える。テニス実施者にとっての実施環境を損なわな

いたためにも、テニスクラブを効果的にマネジメントするための知見の獲得が、今後求められるといえよう。

1. 2 学術的背景と研究目的

1. 2. 1 民間スポーツクラブのマネジメントに関する先行研究

テニスクラブをはじめとする民間スポーツクラブのマネジメントに関する研究は、日本において、スポーツマネジメントの研究領域で数多く行われてきた。新規の顧客獲得は、現在の顧客を引き止めることよりも数倍の資金が必要であるといった三宅(1990)の指摘や、今後の民間スポーツクラブのマネジメントにおいては、新規の顧客獲得に加えて、現在の顧客との関係性を深め定着率を高める戦略を選択すべきといった富山(1997)の指摘などからも伺えるように、民間スポーツクラブのマネジメントにおいては、既存の顧客の維持が重要な課題の1つであり、民間スポーツクラブにおける顧客の継続意欲をどう高め維持するのかといった研究が、これまでも盛んにおこなわれてきた。

具体的には、顧客の継続意欲に影響を及ぼす要因として顧客満足に着目し、フィットネスクラブにおける顧客満足測定尺度の比較とその適用法に関する検討を行った中路・築瀬(1998)や、フィットネスクラブの「サービス品質」や「プログラム」が顧客満足に強い影響を及ぼしていることを明らかにした催・柳沢(2002)などが挙げられる。また、顧客の満足と継続に直接的な影響を与える要因として、クラブにおける指導者に着目した研究も多く見られ、指導者の職務満足を構成する要因を検討し、「職場環境」、「経営者の指導者に対する扱い」、「給料額」に配慮することの重要性を示した新出(1996)や、フィットネスクラブ従業員の職

務特性と職務満足について研究し、「給料」、「施設・設備の充実」、「福利厚生施設」、「教育研修体制」、「昇給の方法」に関する改善が求められると指摘した木村・大鋸(1995)といった研究が、その代表的なものとして挙げられよう。また、最近ではクラブへの心理的コミットメントと顧客苦情行動の関係について検討した中西(2010)といった研究も見られ、こういった数々の研究は、民間スポーツクラブを効率的にマネジメントするための知見の提供に、多くの貢献をしてきたといえる。

しかしながら、先行研究においては、中路(2006)が縦断的調査によってフィットネスクラブにおける会員の顧客満足と会員継続について検討を行っているものの、このように顧客の継続意欲や実施頻度の向上を、縦断的な調査にて確認する所まで踏み込んで行っているものは少なく、その点が課題として残されていると考えられる。医療や教育などの分野における研究まで視座を拡げてみた場合、職員や学生のやる気や意欲が、介入プログラムによって高められることを実証した研究が多く見られ(高橋・橋本, 2011; 橋爪ら, 2010; 菊池, 2009; 北見ら; 2011)、こういったことを踏まえると、テニスクラブを始めとする、民間スポーツクラブのマネジメントに関する研究において、戦略的に顧客の意欲や実施頻度を高めるような介入プログラムに関する研究が今後求められているといえよう。

1. 2. 2 スポーツ参加への意欲や頻度を高めうるプログラム

人のやる気や意欲は、心理学の領域においてはモチベーション（動機づけ）という概念を用いて表され、それについての膨大な数の研究がこれまでも行われてきている（宮本・奈須；1995；上淵, 2004；鹿毛, 2012）。スポーツ科学の研究領域においても、最終的なスポーツの

実施・観戦頻度の向上を目指し、モチベーションを向上させるための効果について検討を行った研究は数多く見受けられる。体育・スポーツで多く用いられてきた動機づけ理論に関するレビューを行った深山(2013)によると、体育・スポーツ分野においては、達成動機づけ理論、原因帰属理論、社会的学習理論（自己効力感理論）、達成目標理論、目標設定理論、自己決定理論、および他者志向的動機についての研究が多く行われていることが指摘されている。

こういった中で、「意識的な目標（個人が達成しようとする事柄を表すものであり、それゆえ特定行動の対象または標的）や意図は、個人の行動を支配しているという前提に基づき、目標設定が行動の持続やパフォーマンスに影響する」という目標設定理論(Locke, 1968 ; Hall et al., 2001)や、「人は達成場面において自己の有能さを示そうとし、そのため達成目標を設定し、その目標が行動や感情に影響する」という達成目標理論(Nicholls, 1984 ; Dweck, 1986 ; Ames, 1992)に代表されるように、運動やスポーツの実施において「目標を持つ」、または「目標を立てる」ことは、スポーツ実施者のモチベーションの向上にとって重要な要因になり得ることが窺える。目標を立てることは、スポーツにおいてモチベーションを向上させ、継続意欲や実施頻度の向上に影響を及ぼす可能性があるという点で重要と言えよう。

このことを手がかりに、スポーツ実施者のモチベーションや実施頻度の向上などに影響を与えうるプログラムについて、「スポーツ実施者にとっての目標」といった観点から先行研究をレビューしていくと、まず、「競技プログラム（競技会）」というキーワードが浮き上がってくる。例えば、八代・中村(2002)は、「スポーツはその本質において競争を含んだ活動であり、スポーツを継続する上で競争欲求が絶えず満たされることは極めて重要である」、「競技プログラムを楽しむと同時に、事前の練習を豊かにしたり、さらには終わった後もそのおも

しろさや魅力にとりつかれてその運動を行うようになれば、競技プログラムによってかなり豊かな運動生活がもたらされることになる」と述べており、競技プログラムを一つの目標とすることで、競技プログラム前後のスポーツ実施へのモチベーションや実施頻度などが向上するきっかけとなる可能性が考えられる。

また、築瀬ら(1988)も、学校における運動プログラム(運動会)が、運動継続意識を高めたり、運動に対する認識を高めたりすることに有効であると指摘している。他にも、サークル・マラソン参加者のマラソン継続要因に影響を及ぼす要因として、市が主催する講座の開催というきっかけや、活動地域におけるマラソン大会の実施などを明らかにした岡本ら(2010)や、テニス教室に参加した婦人36名を2年間に渡り追跡調査し、スポーツの継続化における要因として「上手になりたい」「試合に出場したい、勝ちたい」といったものが重要であるということを明らかにした金崎ら(1989)といった研究も存在している。加えて、最近ではテニス競技会への参加頻度が高いほど、「健康・体力作り」、「ストレス解消」を除く、全てのテニス参加動機要因が強いことを指摘した研究も行われており(霜島, 2011)、以上のことから、競技会への出場、あるいは競技会で良い成績を残すといった目標を立てることが、テニス実施者におけるテニス実施へのモチベーションや頻度の向上等に繋がる可能性が考えられる。

さらに、引き続き「スポーツ実施者にとっての目標」に関わるプログラムについて先行研究のレビューを行っていくと、「質の高いプレーの観戦プログラム」というキーワードが浮かび上がってくる。醍醐(2011)は「プロの素晴らしいパフォーマンスを観ることが、スポーツの実施へのモチベーションにも影響を与える」という仮説に基づき、大学でのダンスの授業

において、プロのバレエダンサーの演舞を解説付き DVD 鑑賞プログラムが、大学生のバレエへの態度の変容や継続意図（する・みる）の向上に影響を与えることを明らかにしている。

教育心理学の研究領域では、学習へのモチベーションを向上させる研究として、前述した「達成目標理論」の観点から、社会的動機づけの1つとして、学校教育現場における「あこがれ（尊敬）」が児童・生徒の「意欲」、「やる気」、「負けん気」といったモチベーションに影響を及ぼすことを明らかにした青木・中島(2011) といった研究が存在する。醍醐(2011)の研究は、この青木・中島(2011)の理論をスポーツに適用したものであると考えることが可能である。

これに類似した研究として、林ら(2004)は、サッカーワールドカップの観戦が中学生のサッカー実施に影響を及ぼす可能性を明らかにしている。

以上のことから、テニス選手の素晴らしいプレーを見ることが、テニス実施者にとって「あこがれ」を抱くきっかけになり、実施者のモチベーションや実施頻度の向上などに影響を与える可能性が考えられる。「質の高いプレーを映像で選手へ意図的に観せることで、競技へのモチベーションやパフォーマンスを向上させる」といった研究も存在し(山崎・杉山, 2009)、レベルの高いプレーやゲームを映像で観戦することが、実施者のモチベーションや実施頻度の向上に影響を与える可能性は十分に考えられるといえよう。

1. 2. 3 先行研究の課題と研究目的

前節における、先行研究のレビューから導き出される課題として、まず、競技会への参加がスポーツ実施者のモチベーションや実施頻度といったテニス参与の質的な部分に影響を与える可能性は考えられるものの、全て横断的な研究であり、実際にスポーツ実施者を「競技

会へ参加させること」を通して、それらの要因がどのように変化するのか縦断的に追求した研究は存在しないという点が挙げられる。

また、「レベルの高いプレイヤーのプレーやゲームの映像観戦」を通して、スポーツへのモチベーションの変化について検討した研究は散見されるが、これらの研究における観戦はすべて映像によるものであり、直接観戦を通してスポーツ実施者に生じる変化を検討した研究は存在していない。

以上のことを踏まえ本研究では、民間テニスクラブにおいて「テニススクール生の競技会への参加が、テニスへの参加にどのような影響を与えるのか実証的に検証する」こと(研究1)と、「テニススクール生の競技観戦プログラムへの参加が、テニスへの参加にどのような影響を与えるのか実証的に検証する」こと(研究2)を研究の目的とする。

第2章 競技会参加が与える影響

2. 1 研究方法（研究1）

2. 1. 1 競技会の選定

本研究で対象とする競技会の選定において、研究成果の適応可能範囲を拡げる意味でも、実現可能性が高い競技会を対象とすることが望ましいと考えられた。

そのためには、競技会への参加における参加費があまり高すぎたり、会場までの距離が遠すぎたり、開催頻度が極めて低かったりするような競技会を避ける必要があった。よって、本研究においては、対象とする競技会として、金銭的に安価で、各市区町村で定期的に行われるものと思われる「市民テニス大会」、または「区民テニス大会」といった、行政によって定期的に地域で開催されるテニス競技会を採用するものとした。

2. 1. 2 調査概要（研究1）

2011年7月に、東京都S区にあるTテニスクラブにて、テニススクール生（以下スクール生）を対象に近隣のスポーツ施設で開催が予定されていたテニス競技会（東京都S区秋季区民大会）への参加を促した。Tテニスクラブでは、中学生以下の年代を対象とした「ジュニアクラス」と、高校生から高齢者までの年代を対象とした「一般クラス」が存在し、一般クラスは、入門・初級・初中級・中級・中上級・上級の6レベルから構成されている。本研究においては、調査対象の選定において、競技のルール等に対する知識をまだ十分に持ち合わせていないと考えられた入門クラスや、筆者の意図とは関係なく競技会に参加する可能性

があった中上級、上級クラスのスクール生は対象から除外した。

そして、対象となる初級・初中級・中級のスクール生に対し、T テニスクラブのヘッドコーチの許可を得た上で、テニスクラブでのレッスンプログラムの前後に、インターセプト法にて調査への協力を仰いだ。具体的には、まず、テニス競技会への出場に対し、参加の興味や関心があることを確認した上で、東京都 S 区秋季区民大会団体戦¹についての情報を提供した。その上で、このテニス競技会に対して参加の了承を得られたスクール生を「競技会参加群」として設定した。「競技会参加群」については、サンプルサイズが目標としていた 30²になった時点でサンプリングを終了した。「競技会参加群」のサンプリング終了後、筆者が大会に関する情報を与えておらず、結果、同区民大会にエントリーを行わなかった T テニスクラブにおける初級レベルから中級レベルのスクール生に対し、「競技会参加群」同様、インターセプト法によってサンプリングを行い、調査協力への同意が得られたスクール生を「競技会非参加群」として設定した。なお、「競技会参加群」に関しては、2011 年 9 月に行われることが予定されていた東京都 S 区秋季区民大会団体戦にエントリーをさせた（筆者と競技会参加群の代表者 1 名でエントリー申込み・チームの振り分けを行った）。

そして、競技会参加群と競技会非参加群における時間の経過と共に生じる変化を分析するために、質問紙調査を実施することとした。調査に関しては、競技会への参加が与える影響を、「競技会への参加申し込みから競技会の直前までの期間において生じる変化」と、「競技会への出場、すなわち会場でテニス競技を行うことによって生じる変化」を各々把握するため、競技会 1 ヶ月前・競技会直前・競技会直後の 3 度に渡って調査を行うこととした。³ただし、S 区秋季区民大会団体戦においては、男女で競技の開催日程が若干異なっていたため、

調査間隔が競技会参加群における男女と、競技会非参加群において、同じになるように配慮をした（図1）。また、調査対象者全員に対し、同時に記入を求めることは不可能であったため、質問紙の配布から回収まで1週間の期間を設け、回収できなかったサンプルに関してはデータを無効とした。なお、調査対象者に対しては、調査の主体、目的等について口頭で説明を行った上で、途中中断の権利、不利益からの保護、プライバシーの保護についても説明し、同意を得た上で調査を行った。

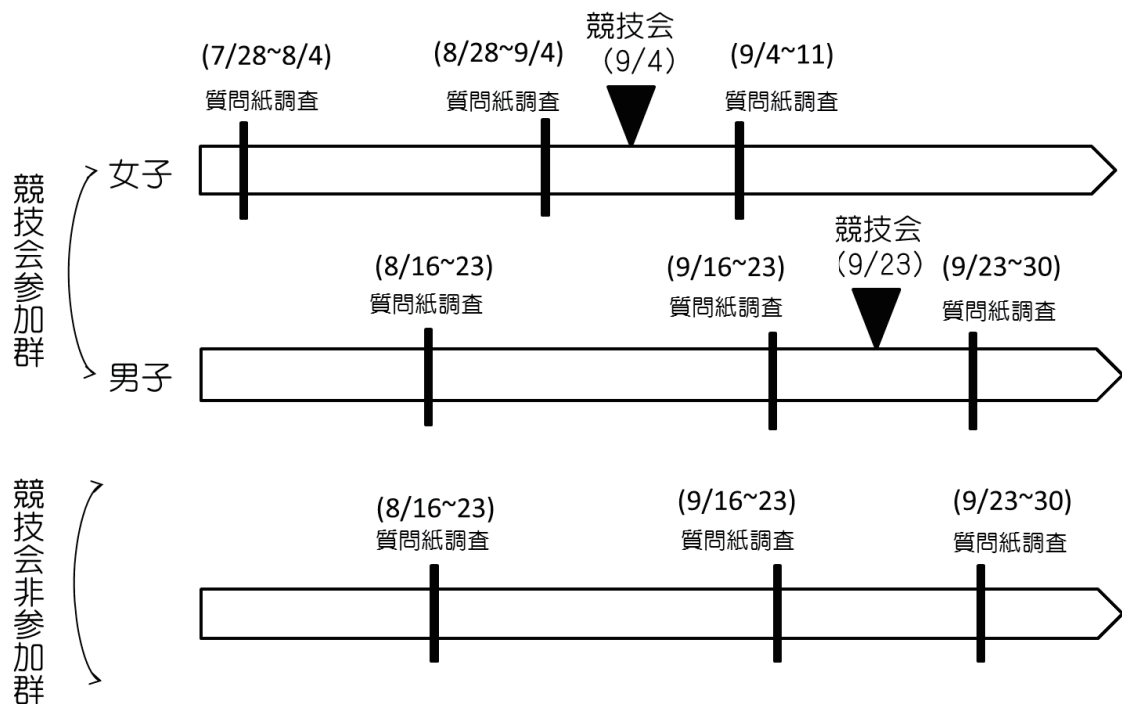


図1 調査スケジュール

2. 1. 3 従属変数の設定 (研究1)

研究1では、競技会参加の影響を測るための変数として、テニスへの参加動機、テニスへの継続意図、プロテニストーナメントへの観戦意図、テニスへの実施頻度（参加頻度）を設

定するものとした。従属変数において、テニスへの参与における「する」だけでなく、「観る」に関するものも使用した。理由としては、短期的にみれば、「観る」ことへの意識の向上は、観戦を主要なプロダクトとしていないテニスクラブにとって、直接的な収益等には繋がらない可能性が高いが、長期的に見た場合、「する」に続く大きな参与形態である「観る」が高まることによって、テニスそのものに対する興味や心理的な傾倒が高まり、テニスの継続化等に貢献する可能性が考えられることや、観戦人口等の向上が、テニス市場の活性化に繋がり、間接的にテニスクラブにも好影響を及ぼす可能性が考えられたからである。なお、設定した各々の従属変数についての選定理由については、以下に述べる通りである。

まず、テニスへの参加動機であるが、霜島・木村(2013)によると、テニスへの参加動機はテニス実施への動機づけとなる要因群であり、「技術向上」、「社交」、「健康・体力作り」、「ストレス解消」などの11の要因から構成されている。参加動機の大きさが高まることは、テニス実施に対しより強く動機づけされることを意味し、参加動機は競技会参加プログラムの効果を測定するための変数として、重要であると判断した。

そして、スポーツ行動においては、行動は直接予測されるのではなく、行動への意図（行動意図）が予測変数とされるといった考えに基づき、スポーツへの行動意図という変数がこれまで多くの研究で使用されてきた(Ajzen and Driver, 1992 ; Fishbein and Ajzen, 1975 ; Riddle, 1980 ; 霜島・木村, 2012 ; 霜島・木村 2013)。このことから、テニス実施者のテニス継続を規定する重要な変数として「テニスへの継続意図」と、テニス観戦行動を規定する要因として、霜島・木村(2013)の「プロテニストーナメントへの観戦意図」を本研究における従属変数として設定するものとした。

最後に、「テニスへの実施頻度」であるが、競技会への参加プログラムが、参加者の意識や意欲にどのような影響があるかだけでなく、実際の行動にどの程度影響を及ぼしうるのか把握することは、研究目的を達成する上で重要であると考えられた。よって、「テニスへの実施頻度」も、研究1における従属変数として設定するものとした。

一方、参加動機に対する「観戦動機」、実施頻度に対する「観戦頻度」は、テニスの観戦経験があることが前提の変数であり、緒言でも述べたように、観戦者人口が多くないといった日本におけるテニス観戦の現状や、本研究における調査対象者などを考える上で適当な従属変数とは考えられなかったため、本研究においては使用しなかった。

2. 1. 4 質問紙の構成

質問紙は、基本的属性、テニスへの参加動機、テニスへの継続意図、プロテニストーナメントへの観戦意図、テニスへの参加頻度（以下、参加動機、継続意図、観戦意図、参加頻度）に関する項目から構成された。

まず、参加動機については、霜島・木村(2013)によって使用された尺度を使用した。霜島・木村(2013)は、McDonald et al.(2002)、Tokuyama(2009)のスポーツ参加動機を基に、わが国におけるテニスへの参加動機は11の要因から構成されているとした上で、それらの因子構造、並びに尺度の妥当性・信頼性の検討を行っている。霜島・木村(2013)の尺度は、わが国におけるテニスクラブの生徒に対し行われたもので、尺度の妥当性、信頼性の検討も十分に行われていることから、本研究に使用する尺度として問題はないと判断した。参加動機要因の具体的な定義、質問項目は表1、表2に示した。質問に関しては、霜島・木村(2013)同様、

7段階リッカート尺度にて行った。

表1 テニスへの参加動機の構成と定義

テニスへの参加動機 (11 要因)	定義
達成	他のことを通じて、求める結果を達成したいという欲求
自己実現	テニスにおいて、自分の可能性を実現し、それを果たしたいという欲求
価値発達	誠実さ、品性、思いやりを学び、作り上げたいという欲求
ストレス解消	心配、恐怖、緊張を和らげたいという欲求
美的	テニスの美しさ、優雅さ、他の芸術的特徴を追求したいという欲求
競争	他者との関係において、人の能力を測り、競争したいという欲求
自己尊重	自分自身に高い敬意を抱きたいという欲求
交流	家族、友人、仕事仲間と共に、より時間を過ごしたいという欲求
所属	自分自身を特別なグループに属させていたいという欲求
技術向上	可能な限り良いパフォーマンスをしたいという欲求
健康・体力作り	健康を感じたり、筋力をつけたり、体型を良くしたり、身体的強さを得たいという欲求

(霜島・木村, 2013 に加筆)

表2 テニスへの参加動機尺度

テニスへの 参加動機	項目
達成	テニスをするのは、自分に人としての成長を与えてくれると思う
	テニスをするのは、何か物事を達成する手助けとなると思う
	テニスをするのは、自分の限界への到達に繋がると思う
自己実現	テニスをするによって、「自分は今うまくいっている人間だ」と感じられる
	テニスをする事で、自分の能力に自信を持つことができる
	テニスをする事で、自信を感じられるようになる
価値発達	テニスをする事で、思いやりのある人間になれる
	テニスをする事で、努力や熱意の大切さを理解することができる
	テニスをする事で、他からは学べないことを学ぶことができる
ストレス 解消	テニスをした後は、する前よりストレスが軽くなっている
	テニスをする事で、日々のプレッシャーから解放されることができる
	テニスは、落ち込んでいたり、イライラしている時に最適である
美的	テニスをするのは、自分自身を表現する1つの方法である
	テニスのプレーには美しさがあると感じる
	私はテニスのプレーに、自分の個性・性格を表現している
	私は、テニスのプレーにおける芸術性の追求を楽しんでいる
競争	テニスをしていると、負けず嫌いになる
	対戦相手が強ければ強いほど、私はテニスを楽しむことができる
	競争は、自分がテニスに参加する上での、重要な要素の1つである
自己尊重	私のテニスにおける目標は、テニスで突出した存在になることだ
	私は、テニスで結果を出したいという強い願望を持っている
	私はテニスでの成功者になるために、年間を通して努力しつづけるつもりだ
交流	テニスへの参加は、自分の友人達と時間を共有する機会を与えてくれる
	新たな出会いのチャンスを与えてくれるのが、テニスをする楽しさでもある
	テニスの楽しさは、他の人々とテニスをした経験を共有できることだ
所属	グループでのテニス参加は、社会的な関係を良好にさせることへと繋がる
	テニスをしていると、自分は特別な集団に属していると感じられる
	私は、テニスをする人々との間に、何か絆のようなものを感じる
技術向上	テニスをする人々の中には、ある種の仲間意識のようなものが存在する
	自分の目標を達成するため、高い技術を身につけたいと思っている
	マスターするのが難しい点があるが、テニスをプレーする面白さでもある
健康 体力作り	マスターするのが難しいので、テニスをするのは常にチャレンジである
	私がテニスをするのは、健康維持のためである
	体力（筋力、持久力、抵抗力）を向上させたいので、私はテニスをしている
	私がテニスをするのは、テニスが健康に良いと感じるからである

(霜島・木村, 2013 に加筆)

また、継続意図に関しては、「あなたは今後もテニスを継続していきたいと思いませんか？」という尺度を設定し、7段階リッカート尺度にて質問した。加えて、観戦意図は霜島・木村(2013)を参考に、「あなたは、トップ選手の集まる『ジャパンオープン』あるいは『東レ・パシフィックオープン』といったテニスのプロトーナメントを、試合会場で観戦してみたいと思いませんか？」といった項目を設定し、7段階リッカート尺度にて質問した。最後に、参加頻度については「テニスへの参加を週に何回程度行っているか」といった形で質問した。

なお、分析において対応関係を重視した検定を行うことが想定していたため、取得された質問紙を誰のものか判別できるような配慮が匿名性を担保した上でなされる必要があった。よって、質問紙調査において、個人が特定されないようなニックネームを調査対象者にあらかじめ設定してもらい、その上で3度行われる質問紙調査において各々記入してもらうといった作業を、調査対象者の許可を得た上で行った。

2. 1. 5 分析方法（研究1）

競技会参加群と競技会非参加群における、テニスへの参加動機・継続意図・参加頻度の競技会前後の比較については、群(競技会参加群・競技会非参加群)×時間(競技会1ヶ月前・競技会直前・競技会後)の二元配置分散分析(対応のない因子と対応のある因子)を行った。なお、統計的有意水準は5%とし、統計的有意確率が5%から10%であったものについては統計的有意傾向があるとした。

分析ソフトにはSPSS.ver18.0を用い、分析手続きにおける参考書、参考資料として、石村・石村(1997)と山崎・杉山(2009)を使用した。

2. 2 結果（研究1）

2. 2. 1 サンプルの基本的属性と従属変数の平均値

取得された質問紙の中から、3度の有効回答が得られなかったサンプル、調査期間内にS区秋季区民大会以外の競技会に出場したサンプルを除いた結果、有効サンプル数は、競技会参加群が27(男性16、女性11)、競技会非参加群が22(男性10、女性12)であった。競技会参加群の年齢平均は40.3±10.84歳であり、競技会非参加群の年齢平均は40.0±8.50歳であった。競技会参加群と競技会非参加群における、競技会1ヶ月前・競技会直前・競技会直後の「参加動機」、「参加頻度」、「継続意図」、「観戦意図」の平均値を以下の表3にまとめた。

表3 テニスへの参加動機・参加頻度・継続意図の平均値

	競技会1ヶ月前				競技会直前				競技会後			
	競技会参加群		競技会非参加群		競技会参加群		競技会非参加群		競技会参加群		競技会非参加群	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
達成	4.90	1.20	4.67	1.31	4.64	1.16	4.64	1.34	4.70	1.25	4.71	1.33
自己実現	4.36	1.23	4.21	1.11	4.25	1.50	4.19	1.19	4.31	1.46	4.30	1.06
価値発達	5.19	1.16	4.92	1.26	5.00	1.30	4.77	1.25	5.16	1.17	4.82	1.22
ストレス解消	5.19	1.28	4.97	1.29	5.06	1.37	4.98	1.22	5.14	1.36	4.95	1.17
競争	4.73	1.09	4.55	1.25	4.83	1.25	4.41	1.24	4.89	1.30	4.36	1.17
自己尊重	4.12	1.37	3.68	1.31	4.32	1.61	3.76	1.41	4.38	1.59	3.85	1.44
所属	4.52	1.13	4.15	1.13	4.65	1.51	4.38	1.14	4.74	1.42	4.27	1.17
技術向上	5.47	1.19	5.11	1.24	5.46	1.10	5.00	1.37	5.79	1.13	4.89	1.31
健康体力作り	5.44	1.39	5.44	1.35	5.52	1.43	5.39	1.26	5.53	1.32	5.39	1.37
美的	4.72	1.24	4.27	.95	4.63	1.41	4.28	1.18	4.64	1.39	4.35	1.09
交流	5.31	1.26	5.28	1.14	5.22	1.33	5.15	1.18	5.44	1.46	5.03	1.23
参加頻度	1.44	.71	1.35	.62	1.63	.82	1.39	.64	1.56	.81	1.40	.73
継続意図	6.74	.66	6.09	.97	6.69	.48	5.86	.99	6.63	.57	5.86	1.20
観戦意図	5.85	1.59	4.82	1.79	5.89	1.53	4.64	1.97	5.85	1.59	4.77	1.95

そして、得られたサンプルに対し、群（競技会参加群と競技会非参加群）×時間（競技会1ヶ月前・競技会直前・競技会後）の二元配置分散分析を行った。以下、各尺度別に結果を述べる。

2. 2. 2 テニス参加動機の変化

参加動機要因を従属変数とした場合、群と時間の交互作用が「技術向上」において有意であり、「交流」に関しては有意傾向⁴が見られた（技術向上 $F=8.58$, $p<0.01$ 、交流 $F=2.64$, $p<0.1$ ）。一方で、主効果は「技術向上」、「交流」において有意ではなかった。それ以外の参加動機要因には、交互作用ならびに主効果の統計的有意性は確認されなかった。

交互作用が確認された「技術向上」、「交流」に関しては、単純主効果検定を行った。結果「技術向上」に関しては、競技会参加群において競技会1ヶ月前と競技会後、そして競技会直前と競技会後において有意な差が確認された。「交流」に関しては有意な差は確認されなかった。また、単純主効果検定の結果から、競技会参加群と競技会非参加群を比較した際には、競技会後においてのみ「技術向上」の値に有意差が確認された（図2、図3）。

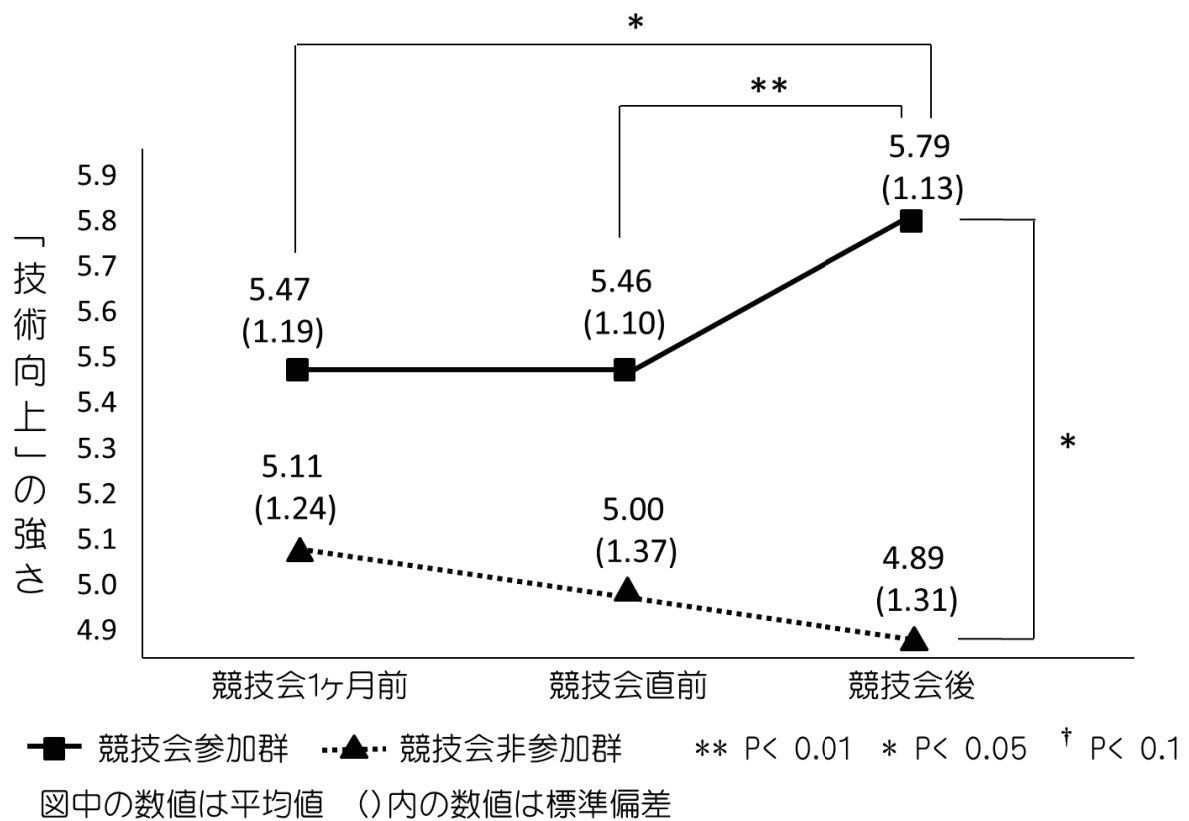


図2 競技会参加群と競技会非参加群におけるテニスへの参加動機(技術向上)の変化

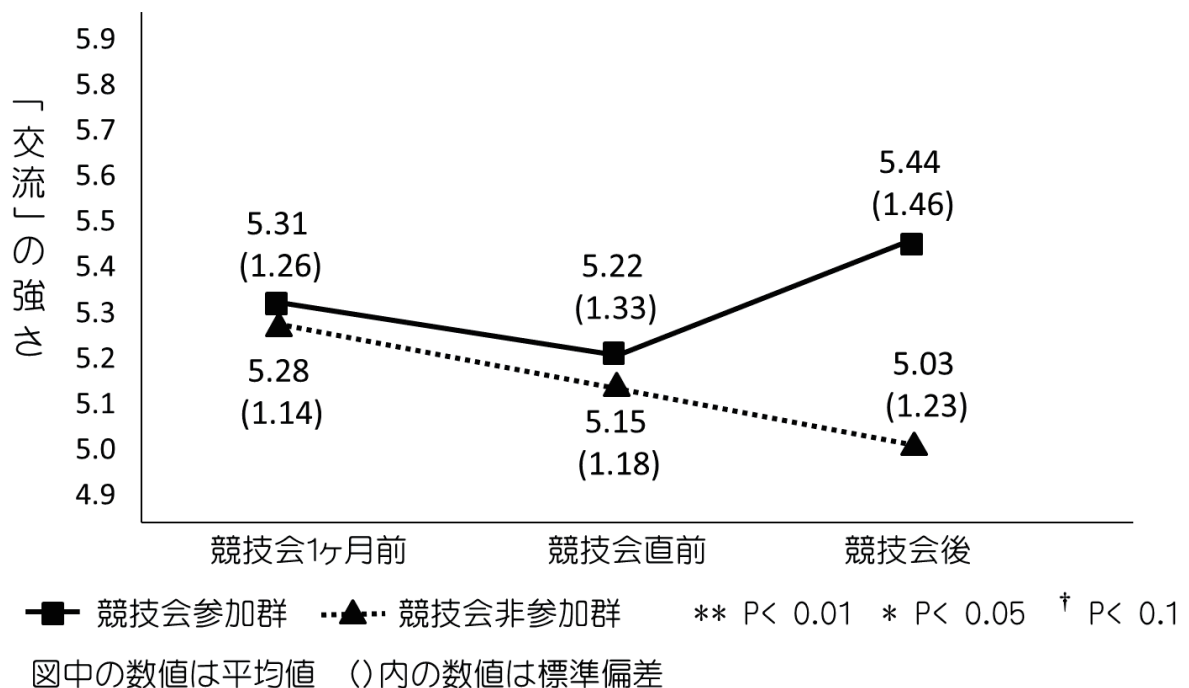


図3 競技会参加群と競技会非参加群におけるテニスへの参加動機(交流)の変化

2. 2. 3 継続意図の変化

継続意図を従属変数とした場合、時間の主効果($F=2.75, p<0.1$)に有意傾向が見られた。一方で、群と時間の交互作用には統計的有意性は確認されなかった。主効果に有意傾向が確認されたことから、制約付 LSD 法による多重比較を行った。永田・吉田(1997)によると、制約付 LSD 法は 4 群以上の時は用いてはならないが、3 群の場合には多重比較の方法として誤った手法ではないと述べられており、本研究における分析手法として、問題なく使用できると判断した。結果、競技会非参加群の競技会 1 ヶ月前から競技会直前、競技会直前から競技会後の間に有意傾向が確認された。競技会参加群には時間における有意な差は確認されなかった(図 4)。

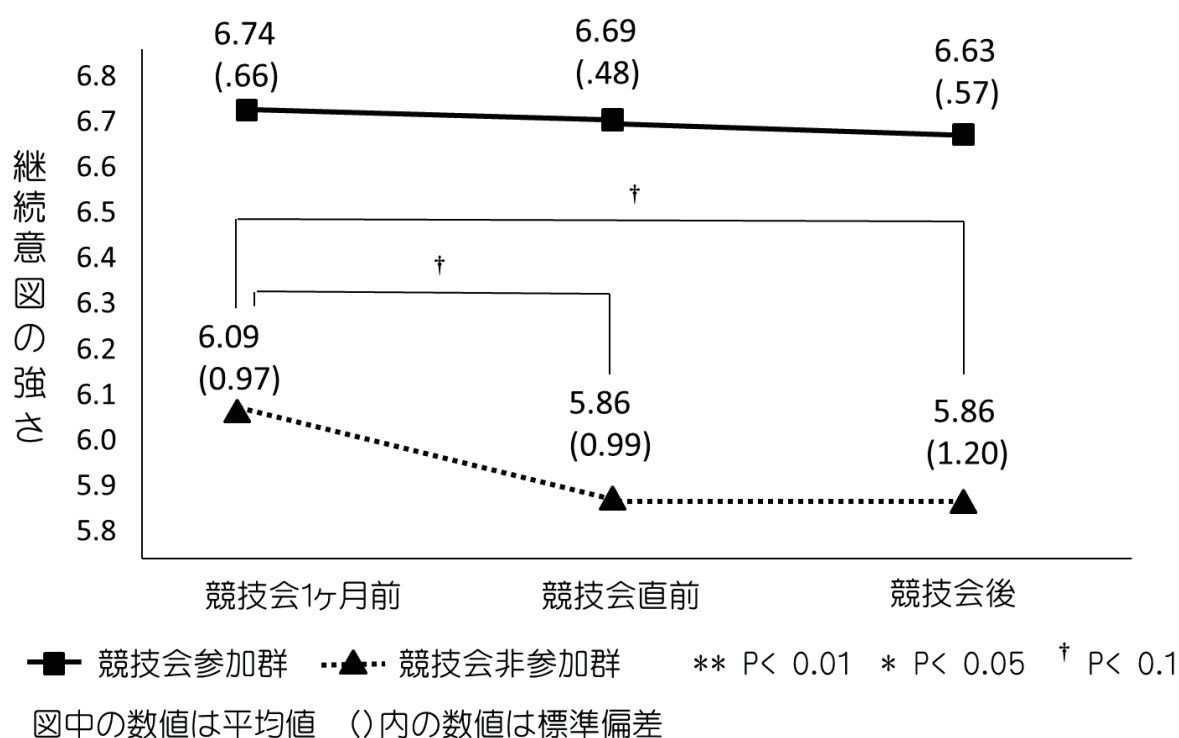


図 4 競技会参加群と競技会非参加群におけるテニスへの継続意図の変化

2. 2. 4 観戦意図の変化

観戦意図を従属変数とした場合、交互作用ならびに主効果の統計的有意性は確認されなかった (図 5)。

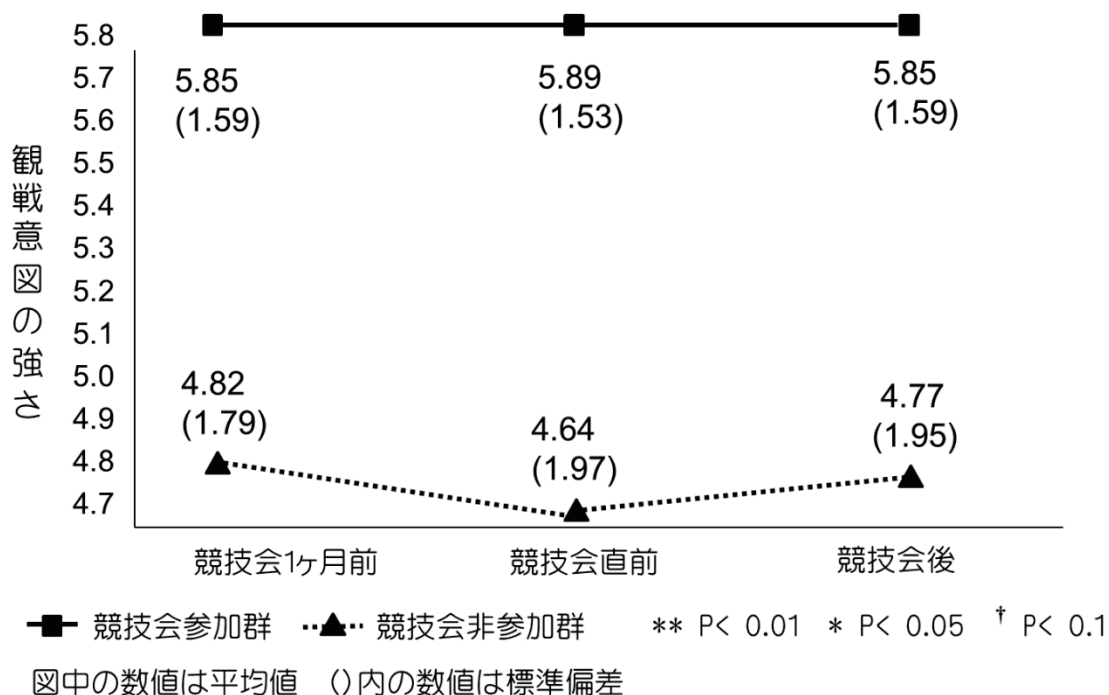


図 5 競技会参加群と競技会非参加群におけるプロテニストーナメントへの観戦意図の変化

2. 2. 5 参加頻度の変化

参加頻度を従属変数とした場合、時間の主効果($F=3.32, p<0.05$)が有意であった。群と時間の交互作用には統計的有意性は確認されなかった。主効果が確認されたことから、継続意図の分析と同様に、制約付 LSD 法による多重比較を行った。結果、「参加頻度」に関しては、競技会参加群の競技会 1ヶ月前から競技会直前でのみ有意な差が確認された (図 6)。

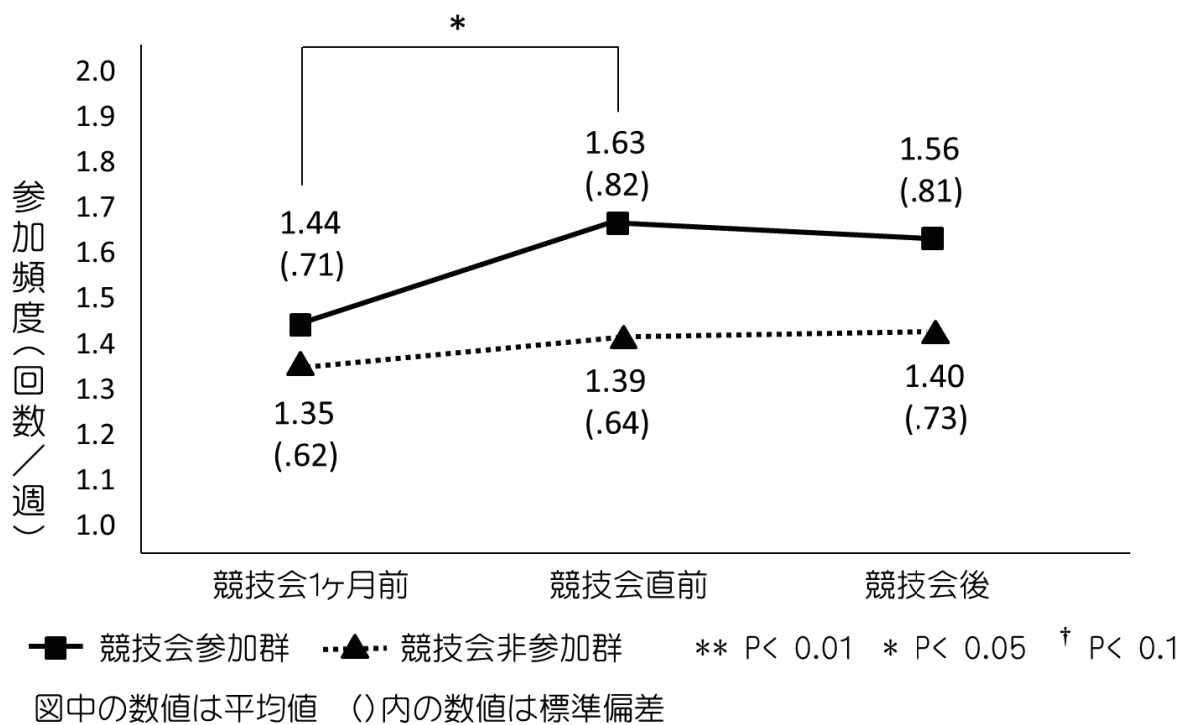


図6 競技会参加群と競技会非参加群におけるテニスへの参加頻度の変化

2. 3 考察 (研究1)

2. 3. 1 競技会参加による参加動機の変化について

参加動機の「技術向上」に関して、交互作用が有意であったことから、競技会参加群と競技会非参加群では、時間（競技会 1 ヶ月前・競技会直前・競技会后）において変化のパターンが異なっていることが示された。具体的には、競技会参加群においては、「技術向上」の参加動機の強さが競技会 1 ヶ月前から競技会后、また競技会直前から競技会后にかけて向上しており、競技会非参加群においては時間による変化はないことが、単純主効果検定の結果より明らかになった。

以上より、競技会へ参加することによって、「技術向上」の参加動機が向上する可能性が示された。特に競技会の直前から競技会后にかけて値が大きく向上していることから、競技会へ出場して試合を行うことが、「技術向上」の参加動機が向上に影響を与えることが示唆された。これは、試合を経験することによって、技術的な向上をより強く望むようになるということが起因しているものと推察される。

また、「交流」の参加動機に関しては、競技会参加群と競技会非参加群において交互作用に有意傾向がみられた。ここから、「交流」は「技術向上」同様に、競技会参加群と競技会非参加群で時間における変化のパターンに異なった傾向がある可能性が確認された。しかしながら、単純主効果検定の結果、競技会参加群、競技会非参加群ともに時間における有意な差異は確認されなかったため、具体的に競技会 1 ヶ月前から競技会直後にかけて、どこで変化が起きたのかといったことを明確に示すことは出来なかった。ただ、交互作用が有意傾向を示したことと、競技会参加群において「交流」の平均値が、競技会直前から競技会直後にかけて

て大きく向上していることから見ても、競技会への出場が「交流」の大きさに影響を与えた可能性は十分に考えられる。

霜島(2011)においても、「技術向上」と「交流」は、テニス実施者のテニス参加動機において、最も重要度が高い参加動機であることが指摘されており、これらの参加動機が高まることは、テニス実施の継続化において重要な要因となりえると言えよう。

2. 3. 2 競技会参加による継続意図の変化について

継続意図に関しては分散分析の結果、時間における主効果に有意傾向が見られたことから、競技会参加群、競技会非参加群それぞれに対し、多重比較による検定を行った。多重比較の結果から、競技会非参加群の競技会 1 ヶ月前から競技会直前、競技会直前から競技会後の間に有意傾向が確認された。競技会参加群には時間における有意な差は確認されなかった。

競技会非参加群において、継続意図は競技会 1 ヶ月前には 6.09 であったのにも関わらず、競技会直前には 5.86 と減少している。このことから、この 1 ヶ月の間に、対象としたテニスクラブにおいて、スクール生の継続意図を低下させようような出来事が何かあったことも推察される。しかし、競技会参加群においては同期間において、継続意図の減少は競技会非参加群と比べてわずかであり、統計的に有意な減少も見られなかった。ここから、競技会への参加予定があることが、スクール生の継続意図の減少を抑制する効果がある可能性が示唆された。継続意図の減少の抑制に関しては、「競技会への出場予定があるうちは、少なくともテニスをやめるといった考えにはなりにくい」といったことが考えられ、逆に、競技会の参加などの具体的な目標がないと継続意図が減少してしまう可能性もあると、この結果から読み

取ることができる。

なお、継続意図の減少に関しては、競技会参加群の雰囲気や区民大会参加を通して変化し、そのことが、競技会非参加群に何らかの影響を与えたという可能性も否定できない。今後は、このような点にも留意して研究を行っていく必要があると考えられる。

2. 3. 3 競技会参加による観戦意図の変化について

観戦意図に関しては分散分析の結果、交互作用ならびに主効果の統計的有意性は確認されなかった。このことから、競技会への参加が観戦意図には影響を及ぼさない可能性は高いと考えられる。しかし、霜島・木村(2013)によると、技術向上と観戦意図には強い関係性があることが指摘されており、競技会の参加を通して技術向上の値は向上していることから、1か月程度の短期間では、観戦意図の変化は起きないといった可能性も考えられる。観戦意図の変化を厳密に把握するためには、半年や1年などのより長期間での検討や、インタビューなどの質的な調査による、追加的な検討が今後必要になると言えよう。

なお、継続意図、観戦意図については、全体的に平均値が高く、特に継続意図に関しては極めて高い値となった。継続や観戦への意欲の変化をより正確に測定するためには、単一の項目から構成されるこれらの尺度では不十分な可能性もあり、例えば複数の項目から構成される尺度を測定に使用するなどといった、従属変数の再検討が今後の研究で必要になると考えられる。

2. 3. 4 競技会参加による参加頻度の変化について

参加頻度に関しては、時間における主効果が有意であったことから、競技会参加群、競技会非参加群それぞれに対し、多重比較による検定を行った。その結果、競技会非参加群においては時間による参加頻度の差は見られなかったが、競技会参加群において競技会 1 ヶ月前から競技会直前まで参加頻度が有意な向上を示した。このことは、競技会への参加予定があるスクール生は、競技会前の期間において、より積極的にテニスへ参加するようになる可能性を示している。

競技会参加による実施頻度の向上は、テニスの普及において重要な知見であるだけでなく、民間テニスクラブにおけるマネジメントなどにも応用可能な知見である。例えば、テニスクラブのスクール生を競技会への参加へと導くことで、レッスンを重複して受講する生徒の増加や、時間貸し利用者の増加を見込めるなど、クラブマネジメントにおいても生徒を積極的に試合へ参加させる戦略は有効となりうることが示唆された。

また、継続意図・参加頻度に関しては、「競技会前までの期間」においての変化であることから、「雨などで競技会が中止になったとしても効果が見込める」といった点も、有効性を高めていると考えられる。今回は区民大会という対外的な競技会であったが、民間テニスクラブにおいては、例えばスクール生大会などを定期的に行うことで、既存のスクール生の実施頻度を向上させつつ、競技会への参加料から利益を得るといったマネジメント戦略を立てることも有効であると言えよう。

2. 4 結論（研究1）

研究1では、民間テニスクラブにおけるテニススクール生の競技会への参加が、テニスへの参加にどのような影響を及ぼしたのか、東京都S区の区民大会への参加を通して実証的に検証を行った。結果として、テニス競技会への参加が、実施者のテニス参加動機、実施頻度、継続意欲に影響を及ぼすことが明らかとなった。また、競技会への参加が与える影響について縦断的に明らかにしたことは、テニスの普及のみならず、民間テニスクラブのマネジメントなどへの拡張性を考える上で、重要な知見であると考えられる。しかし、その一方でいくつかの課題についても浮き彫りになった。

まず、サンプルの構成についてであるが、今回の調査では、対象をテニスクラブにおける初級～中級レベルに限定して行ったため、本研究で得られた知見を日本における全てのテニススクール生に適応することは困難である。今後の研究では、テニスクラブにおける上級レベル、入門レベル、ジュニアなどに対しても同様の研究を行う必要があると言えよう。

また、本研究においては、試合内容が研究結果に与えた影響についての考慮まではなされていない。例えば、試合における勝敗が、参加者の意識に大きく影響を及ぼしている可能性も十分に考えられる。この問題については、対象としたサンプルにおいて今回の大会で勝利することが出来たものがほとんど存在しなかったため、勝敗による比較等ができなかったという点が研究の限界として挙げられる。今後の研究においては、試合の内容に関する評価も考慮することが必要である。

さらに、研究1では競技会参加の影響を測るための変数として、参加動機、継続意図、観戦意図、実施頻度を設定したが、継続意図においては、平均値が極めて高い値となってしまう

ったことから、実際の継続行動についての追跡調査を含め、変数の再検討が今後の研究において必要になる。

なお、研究1では、量的な検討によって研究目的を明らかにしたが、競技会への参加者に対するインタビュー調査など、より質的な検討も含めることで、結果の信頼性が高まるものと考えられ、今後の研究において留意すべき点といえる。

第3章 競技観戦が与える影響

3. 1 研究方法（研究2）

3. 1. 1 観戦プログラムの選定

研究1同様、本研究で対象とする観戦プログラムの選定において、研究成果の適応可能範囲を拡げる意味でも、実現可能性が高い観戦プログラムを対象とすることが望ましいと考えられた。テニス実施者が映像ではない、直接観戦を行うにあたって、ジャパンオープンや東レ・パンパシフィックオープンなどのトッププロの試合は、日本においては各々年1回と開催頻度が極めて低だけでなく、霜島・木村(2012)が指摘するように、時間的コスト、金銭的コストを始めとする様々な阻害要因が存在している。

そこで、これらの問題点による影響を受けにくい観戦プログラムとして、研究2では「テニスクラブにおける所属コーチによるエキシビジョンマッチ」を観戦プログラムとして選定した。理由としては、本研究における調査対象はテニスクラブのスクール生であることから、テニスクラブに所属するコーチによるエキシビジョンマッチ（以下エキシビ）であれば、年間数回しか行われないトッププロの試合に比べ、いつでも実施可能であるというメリットが存在し、また、時間的コスト、金銭的コストという阻害要因の影響も受けにくいものと考えられた。最近では、イベントなどで定期的にエキシビを開催するテニスクラブも多いことから、テニス実施者にとって身近な観戦イベントとして、コーチによるエキシビは本研究において対象とする観戦プログラムとして妥当であると判断した。

3. 1. 2 研究2のフレームワーク

以上より、研究2では、観戦プログラムを「テニスクラブのスクール生を対象としたコーチによるエキシビ」とし、研究の目的を達成するため、研究1での課題を踏まえ、以下の2つの研究から検討を行うものとした。

研究2-1 エキシビを観戦したテニススクール生を対象にインタビュー調査を行い、エキシビ観戦がテニススクール生に与える影響について質的側面から検討を行う。

研究2-2 再度エキシビを開催し、テニススクール生へ観戦前・観戦後と質問紙調査をすることで、エキシビ観戦がテニススクール生に与える影響について量的側面から検討を行う。

3. 2 研究2-1

3. 2. 1 調査方法と結果（研究2-1）

研究2-1では、エキシビを観戦したスクール生に対し、インタビュー調査を行うことで、エキシビ観戦がスクール生に与える影響について検討することとした。

3. 2. 1. 1 調査対象の選定とエキシビの概要

本研究においては、調査を実施するテニスクラブを選定する上で、クラブが一定数のコーチや生徒を保有していることや、エキシビの開催に対し協力的であるといった環境が求められた。以上のことから、上記の条件を満たしていると考えられた東京都のTテニスクラブを、本研究における調査対象として選定した。

そして、2011年11月3日、Tテニスクラブにてテニススクール生を対象にしたイベントとして、コーチによるエキシビを開催した。エキシビの内容は、男性コーチ4名によるダブルスの3セットマッチであり、常勤スタッフであったヘッドコーチ並びにチーフコーチ、そして非常勤スタッフであったコーチ2名によって行われた。エキシビにおいて、出場コーチはお互いに全力でプレーすることとし、コーチ4名の属性については、表4に示した。

表4 エキシビ出場コーチの属性（2011年11月3日時点）

コーチ名	勤続年数	役職名	担当クラス数	性別	主な戦績
コーチA	9年半	ヘッドコーチ	24	男	全日本ベテランテニス選手権 best32
コーチB	4年半	チーフコーチ	20	男	全日本ランキング最高 87位
コーチC	4年半	特になし	7	男	JTA 公認大会(J1) best4
コーチD	3年半	特になし	6	男	群馬県高校総体優勝

エキシビは、コーチ A・B ペアから 6-1、4-6 の 1 セットオールとなり、第 3 セットは 7 ポイント先取のタイブレークにて決着をつけた。結果、タイブレークをスコア 7-5 で取ったコーチ A・B ペアが勝利した。

ゲームの詳細なスコアは表 5 に示した。第 1 セットは 6-1 とコーチ A・B ペアの一方的なゲーム展開であったが、第 2 セットはコーチ C・D ペアがセットを取り返した。特に、第 2 セットはお互いのサービスゲームのキープが続き、ゲームを優位に進めるためにはサービスゲームをキープすることが最も効果的であるという宮地(2010)の指摘からも、コーチ同士のエキシビに相応しい好ゲームであったことが窺える。1 セットオールとなった後行われたタイブレークも 7-5 であり、非常に競ったゲームであった。

表 5 2011 年 11 月 3 日に行われたエキシビのスコア

	第 1G	第 2G	第 3G	第 4G	第 5G	第 6G	第 7G	計			
第 1											
セット	A・B ペア	K	K	B	K	B	K	6			
	C・D ペア	K						1			
	第 1G	第 2G	第 3G	第 4G	第 5G	第 6G	第 7G	第 8G	第 9G	第 10G	計
第 2											
セット	A・B ペア	K	K	K	K	K					4
	C・D ペア	K	K	K	K	K	K	B			6

第 1G：第 1 ゲーム / サービスの順番は A→D→B→C

K：キープ（自分たちのサービスゲームをキープしてそのゲームを取ること）

B：ブレーク（相手のサービスゲームをブレークして、そのゲームを取ること）

3. 2. 1. 2 インタビュー調査の方法

インタビュー調査の具体的な方法としては、構造化面接法を用い、2012年4月4日から2012年4月14日にかけて、Tテニスクラブにて実施した。インタビュー対象者は、2011年11月3日のエキシビ観戦者58名(男子28名、女子30名)とした。インタビューでは、「11月3日に行われたコーチ同士によるエキシビジョンマッチを見て何か感じたことについて教えてください」といった形で自由に回答してもらった。取得したデータは、調査対象者の許可を得た上で、その場でフィールドノートに記録し、会話は録音しなかった。

3. 2. 1. 3 倫理的配慮

インタビュー対象者に対し、調査の主体、目的等について口頭で説明を行った上で、調査の同意を得た。また、途中中断の権利、不利益からの保護、プライバシーの保護についても説明し、同意を得た。

3. 2. 1. 4 分析方法(研究2-1)

調査の結果、17名(男子10名、女子7名)からデータが取得できた。データの分析は、川喜田(1967)によるKJ法を用いて行った。KJ法は、多くの断片的なデータを統合し、核心となる要因を抽出できるという点において優れており、この手法はエキシビがスクール生に与えた影響について、うまく抽出・整理できる方法であると判断した。

KJ法を用いて研究を行った堀・清水(2011)を参考に、まず、インタビューの内容を箇条書きでまとめ、エキシビがスクール生に与えた影響と考えられる要因に関連のある各々の内容

を、66枚のカードに記入した。これを基に、スポーツビジネスを専攻する大学院生1名と共に分類、整理を行った。そして、全てのカードについて内容の近いもの同士を集め、5つのグループを編成した。その後、5つのグループに対し、各々見出しを付けた。

3. 3. 2 分析結果（研究2-1）

KJ法による分析の結果、66枚のカードから、エキシビ観戦がテニススクール生に与えた影響として「テニスに対する意欲の向上」、「コーチに対する尊敬・あこがれの高まり」、「コーチに対する心理的距離の変化」、「テニスに対する態度の変化」、「技術・戦術に対する理解の向上」といった5つの概念が抽出された（表6）。

表6 KJ法から抽出された概念

抽出された概念	代表的なテキスト
テニスに対する 意欲の向上(12)	あれを見た後は凄くテニスがやりたくなりましたね
	ああいったのがあると刺激になりますよね
	私もテニスやりたいな、もう1回試合やりたいなと思った
	もっと上手になりたいと思った
コーチに対する 尊敬・あこがれ の高まり(15)	自分もこういう風に打ちたいとモチベーションが上がった
	より一層コーチに対する尊敬の気持ちが大きくなりました
	ああいう風になりたいなど。それは誰しも強く思ったと思いますけどね
	なぜそこにすでに立っているのか分からない。それくらいレベルが高い
コーチに対する心理 的距離の変化(12)	日頃習っているコーチの本気度を見れて感動しました
	本当に上手かったんだなど
	またコーチの意外な一面も見れて面白かったです
	一緒にプレーできたら楽しいだろうなど、一緒に混ぜられたらなあと思った
テニスに対する態度 の変化(2)	コーチを生業とする人でも、ダブルフォルトとかミスするんだなど安心しました
	テニスっていいなーと思った
	1つ言えることは、テニスは楽しいということですよ
	ダブルスの時にサーブを打つ位置とか前に入るタイミングとかが参考になりました
技術・戦術に対する 理解の向上(25)	凄く良く動いていた。あんなに動かなきゃいけないんだなど学びました
	戦術の重要性がわかりました
	自分は予測ができていないので、そういうのが出来たらいいなど。ボールを見ちゃうので
	ああゆうのを見せて頂くと「なるほどね」と凄く思った
	練習の時に言葉で説明されていたものを、実際の動きとして見れて「ああ、こういうことだったんだな」と思いました
	要するに見て覚える。イメージ。コーチの人達の試合の運び方がよく分かった

()は各概念を構成したコードの数

3. 2. 3 考察 (研究2-1)

研究2-1では、分析の結果から5つの概念が抽出されたが、「テニスに対する意欲の向上」、

「テニスに対する態度の変化」といった概念が抽出されたことから、エキシビの観戦がテニススクール生のテニスに対する意欲の向上や、態度の変化に貢献する可能性が示された。

「テニスに対する意欲の向上」を構成するカードを概観すると、「テニス実施に対するモチベーション」に影響を及ぼしているものと考えられるが、「テニスに対する態度の変化」は実施、観戦の両方に影響を及ぼしているとも考えられ、エキシビの観戦が実施、観戦にどの程度影響を及ぼすのかは、量的な検討が必要になると言えよう。また、テニスに対する態度の変化は、インタビュー調査からは 2 つのテキストしか得られなかったため、研究 2-2 での詳細な分析が、特に求められると言える。

また、エキシビ観戦がテニス実施者の「コーチに対する尊敬・あこがれの高まり」に影響を及ぼす可能性があることも示された。青木・中島(2011)によると、尊敬やあこがれの高まりは、意欲や向上心などに影響を与えることが指摘されており、このあこがれが向上したことによって、テニス実施者のテニスへの意欲の向上に影響を及ぼした可能性が考えられる。

3. 3 研究2-2

3. 3. 1 調査方法

研究2-2では、研究2-1で明らかとなった結果を補完するために再度エキシビを開催し、テニススクール生へ観戦前・観戦後と質問紙調査をすることで、エキシビ観戦がスクール生に与える影響について量的側面から検討を行った。

そこで、2012年4月30日にTテニスクラブにおけるテニススクール生を対象にしたイベントとして、エキシビを再度開催することとした。エキシビはTテニスクラブの男性コーチ4名によって行われ、コーチA・EペアVSコーチB・Cペアによるダブルスを1時間程度行うこととした。研究1同様、エキシビにおいて出場コーチは全力でプレーを行うこととし、コーチの属性については、表7に記載した。

表7 エキシビ出場コーチの属性（2012年4月30日時点）

コーチ名	勤続年数	役職名	性別	担当 クラス数	前回のエキシビ 出場の有無	主な戦績
コーチA	10年	ヘッドコーチ	男	24	有り	全日本ベテランテニス選手権 best32
コーチB	5年	チーフコーチ	男	20	有り	全日本ランキング最高 87位
コーチC	5年	特になし	男	7	有り	JTA 公認大会(J1) best4
コーチE	1年	特になし	男	0	無し	東北選抜 Jr.テニス選手権優勝

ゲームは、スコア 7-6(タイブレークは 7-2) でコーチ B・C ペアが勝利した。ゲームの詳細なスコアは表8に示した。両ペア共に、自分たちのサービスゲームをキープする確率が非常に高く、コーチ同士のエキシビに相応しいレベルの高い内容であったことが窺える。また、

最終的にスコア 6・6 のタイブレークにまで突入したことから、かなりの接戦であり、緊張感のある内容の濃いゲームであったといえる。

表8 2012年4月30日に行われたエキシビのスコア

	第1G	第2G	第3G	第4G	第5G	第6G	第7G	第8G	第9G	第10G	第11G	第12G	計
A・Eペア		K	B	K				K		K		K	6
B・Cペア	K				K	B	K		K		K		6

第1G：第1ゲーム / サービスの順番は B→E→C→A

K：キープ（自分たちのサービスゲームをキープしてそのゲームを取ること）

B：ブレイク（相手のサービスゲームをブレイクして、そのゲームを取ること）

調査は質問紙調査にて行うこととし、エキシビ開催の1週間前にスクール生へのプロモーションとして、作成した調査票をTテニスクラブにおける一般クラス（子どもから大人まで、全ての年代を対象としたクラス）のスクール生198名に対し配布した。ただし、調査票の記入に関しては、エキシビ観戦の効果をより正確に測定するため、エキシビ開催前日の夜、またはエキシビ当日に記入するよう求めた。エキシビ観戦希望者は、エキシビ当日に調査票を入場券として提出することが求められた。また、エキシビ当日に調査票を忘れた、もしくは調査票を受け取っていない観戦希望者に関しては、観戦前に会場で調査票の記入を求めた（図7）。なお、分析において対応関係を重視した検定を行うことが想定されたため、研究1と同様、個人が特定されないようなニックネームを質問紙において各々記入してもらおうといった

作業を、調査対象者の許可を得た上で行った。

エキシビ終了時点で、2度目の調査票を配布し、その場で回収を行った。調査票回収後、対応関係の確認できないサンプル、回答内容に対し信頼性が危ぶまれるサンプルについては対象から除外した。なお、調査対象者に対して、調査の主体、目的、途中中断の権利、不利益からの保護、プライバシーの保護について説明し、調査の同意を得た上で調査を実施した。

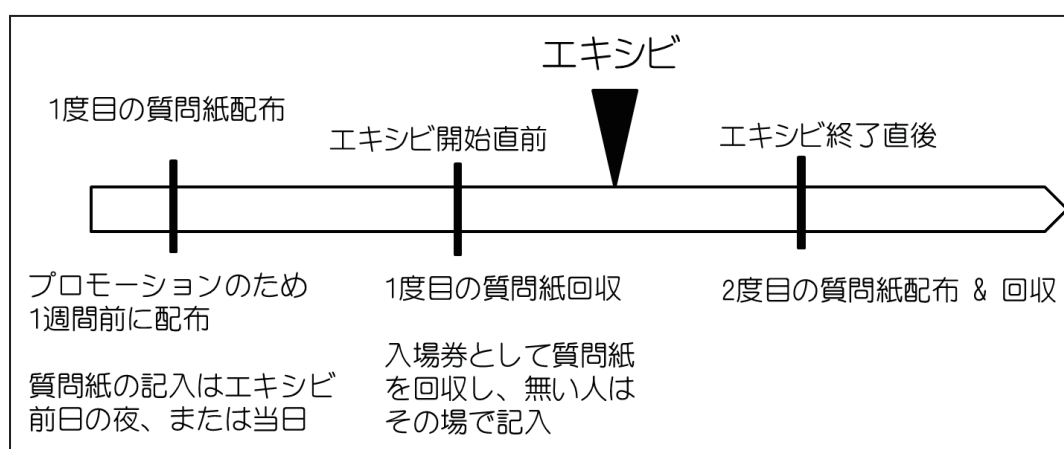


図7 調査スケジュール (研究2-2)

3. 3. 2 従属変数の設定 (研究2-2)

研究1では、競技会参加の影響を測るための変数として、参加動機、継続意図、観戦意図、実施頻度を用いたが、研究2-2では、研究1から導かれた課題、並びに研究2-2で得られた結果を踏まえ、従属変数の選定を行った。

まず、エキシビ観戦前後におけるスクール生のテニス実施・観戦への意欲を定量的に測定するために、本研究では Scanlan, et al. (1993)、Tokuyama(2009)による Sport Commitment (スポーツコミットメント) の尺度を用いることとした。Scanlan, et al. (1993)、

Tokuyama(2009)によると、スポーツコミットメントは、スポーツを「行う」ことや「観る」ことを行いつづけたいという欲求を表す心理的状态と定義されており、テニスに対する意欲を図る上で適切な概念であると考えられた。Tokuyama(2009)で用いられているスポーツコミットメント尺度は、スポーツを「行う」ことへのコミットメント尺度(6項目)、「観る」ことへのコミットメント尺度(6項目)から構成されており、多くの先行研究において使用されている尺度である点からも、テニス実施・観戦への意欲を測定する上で適切であると判断した。

さらに、醍醐(2011)の研究で用いられていた、「スポーツへの態度」を従属変数として使用するものとした。スポーツへの態度を従属変数として設定した理由であるが、まず、研究2-1で、「テニスに対する態度の変化」という概念が抽出されたということと、それに加えて、研究1ではテニスへの実施・観戦へのモチベーションを測る上で、継続意図、観戦意図という行動への意図を従属変数として設定したものの、これらの変数は、特に継続意図において極めて高い平均値となり検討の余地が残る結果となった。スポーツ行動論においては、態度は行動への意図(興味)を予測する主要因であり、スポーツやレジャー・レクリエーションの分野の研究でも、その重要性が報告されているという指摘があり(Ajzen and Driver, 1992; Fishbein and Ajzen, 1975; Riddle, 1980; 大西・原田, 2008)、こういったことから、より複数の項目群から構成される、意図の予測要因であるスポーツへの態度を、本研究における従属変数として設定することとした。醍醐(2011)は、過去の研究で使用されているスポーツ行動に対する態度尺度について、「する」に対しての態度なのか「観る」に対しての態度なのかを、質問文において明確にする必要があると指摘した上で、態度尺度を「する」、「観る」の両側面から、林ら(2004)の6項目の形容詞対を参考に作成しており、本研究に使用する上

で適切な尺度であると判断した。

なお、研究2では、達成目標理論に基づき、学校教育現場における「あこがれ」が児童・生徒のモチベーションに影響を及ぼすことを明らかにした青木・中島(2011)の研究を概念的枠組みの参考にしている。このことから、エキシビ観戦とテニスへの意欲の向上における媒介項として、テニス実施者における「あこがれ」が存在しているものと考えられたことから、本研究における従属変数として、青木・中島(2011)の「あこがれ」尺度も従属変数として設定した。

3. 3. 3 質問項目 (研究2-2)

3. 3. 3. 1 「テニスコミットメント」

Tokuyama(2009)で用いられているスポーツコミットメント尺度は、スポーツを「行う」ことへのコミットメント尺度(6項目)、「観る」ことへのコミットメント尺度(6項目)から構成されている。スポーツコミットメント尺度を本研究に使用するにあたり、英文であったこれらの項目を、スポーツ科学を専門とする、日本語の堪能な英語のネイティブスピーカーと共に日本語へ翻訳した。そして、質問文における「スポーツ」という用語を「テニス」に変換し、これらを「テニスコミットメント(行う)」、「テニスコミットメント(観る)」とした。質問は7段階リッカート尺度にて行った(質問項目は表8に記載)。

3. 3. 3. 2 「あこがれ」

一方、「あこがれ」に関しては、本研究では青木・中島(2011)の「あこがれ」に関する尺度

を使用することとした。Smith(2000)によると、尊敬は「上方同化的感情」と言われ、上方同化的感情とは、「賞賛」や「感激」を包括した「共感的喜び」と定義されている。青木・中島(2011)は上方同化的感情を学校教育現場において、児童や生徒にわかる言葉で表現する上で、「あこがれ」と定義し、尺度の構成(4項目)を行った。青木・中島(2011)によると、あこがれは「意欲」、「やる気」、「負けん気」といった要因の向上に影響を与えることが指摘されている。

本研究では、青木・中島(2011)のあこがれ尺度は4項目から構成されていたが、学校における生徒を対象とした質問文であったため、テニスクラブの生徒へ適応するよう多少日本語を変換し、テニスに当てはまらないと考えられる1項目を削除した上で、7段階リッカート尺度にて使用した。

3. 3. 3. 3 「テニスに対する態度」

本研究では、醍醐(2011)のバレエに対しての態度尺度を、テニスというスポーツに適応するよう一部日本語を書き換え、研究1で得られたインタビューデータを踏まえて、「テニスをするのが好きである」、「テニスをするのは楽しい」、「テニスを観ることが好きである」、「テニスを観ることは楽しい」、「テニスをするのが得意である」、「テニス観戦に詳しい」という項目を作成し、7段階リッカート尺度で質問した。

3. 3. 4 分析結果（研究2－2）

3. 3. 4. 1 サンプルの基本的属性

エキシビは予定通り行われ、観戦者数は56名(男子30名、女子26名、平均年齢42.3歳)であった。回収された質問紙において、対応関係（同一の観戦者から2度調査票を回収できていること）が確認できない質問紙と、回答内容の妥当性が担保されていない質問紙を除外した。その結果、有効サンプル数は50名(男子25名、女子25名、平均年齢は43.1歳)であった。また、T テニスクラブにおける一般クラスは、入門、初級、初中級、中級、中上級、上級の6レベルから構成されているが、50名の所属レベルは、初級4名、初中級11名、中級20名、中上級12名、上級3名という構成であった。

また、50名のうち2012年4月30日の時点で、コーチAが担当するクラスに在籍する者は21名、コーチBが担当するクラスに在籍する者は18名、コーチCが担当するクラスに在籍する者は11名、コーチA・B・C・E以外のコーチが担当するクラスに在籍している者は5名であった（複数のコーチのレッスンを重複して受講している者は、該当するコーチの全てのクラスに在籍していると見なした）。コーチEは担当するクラスが無かったため、在籍する者も0名であった。また、50名の中でコーチA・B・C・Eのレッスンを受けたことがある者は、コーチAは48名、コーチBは47名、コーチCは33名、コーチEは0名であった。

観戦に対する満足度は、押見・原田(2010)によって使用されていた観戦満足尺度を使用し算出したところ、観戦満足度の平均値は7点満点中6.4であった。

3. 3. 4. 2 尺度の信頼性

質問紙で使用した尺度について、Cronbach α 係数を算出し、尺度の信頼性の検討を行った。結果、Cronbach α 係数は「テニスコミットメント(行う)」、「テニスコミットメント(観る)」、「あこがれ」、「観戦満足度」において、いずれも基準である.70 を超える結果となり(小塩, 2004)、これらの尺度は一定の信頼性を有していることが示された(表8)。

表8 尺度の項目と信頼性

概念	質問項目	Cronbach α 係数
テニス コミット メント (行う)	あなたはテニスに対し、どのくらい熱心に取り組んでいますか？	.78
	あなたはテニス続ける上で、他のことをどこまで犠牲にできますか？	
	テニスを完全にやめようとしたら、それはあなたにとってどの位つらい事ですか？	
	あなたはテニスを継続したいですか？	
	あなたはテニスの継続に対し、どのくらい強い決意を持っていますか？	
	あなたは、自分がテニスをしていることを、他の人に伝えることを誇りに思いますか？	
テニス コミット メント (観る)	あなたはテニスの観戦に対し、どのくらい熱心に取り組んでいますか？	.89
	あなたはテニスの観戦を続ける上で、他のことをどこまで犠牲にできますか？	
	テニスの観戦を完全にやめようとしたら、それはあなたにとってどの位つらい事ですか？	
	あなたはテニスの観戦を継続したいですか？	
	あなたはテニスの観戦に対し、どのくらい強い決意を持っていますか？	
	あなたは、自分がテニスの観戦をすることを、他の人に伝えることを誇りに思いますか？	
あこがれ	プロ選手や習っているコーチの中に、凄いと思う人や、あこがれる人がいる	.76
	テニスをしている人の中に、すごいと思う人や、あこがれる人がいる	
	所属しているテニスクラブに、すごいと思う人や、あこがれる人がいる	
観戦 満足度	今回の試合を観戦しようと思ったことに満足している	.84
	今回の試合を観戦しようと思ったことは、正しかった	
	今回の試合を観戦したが面白くなかった	

3. 3. 4. 3 分散分析による観戦前後の差の検定

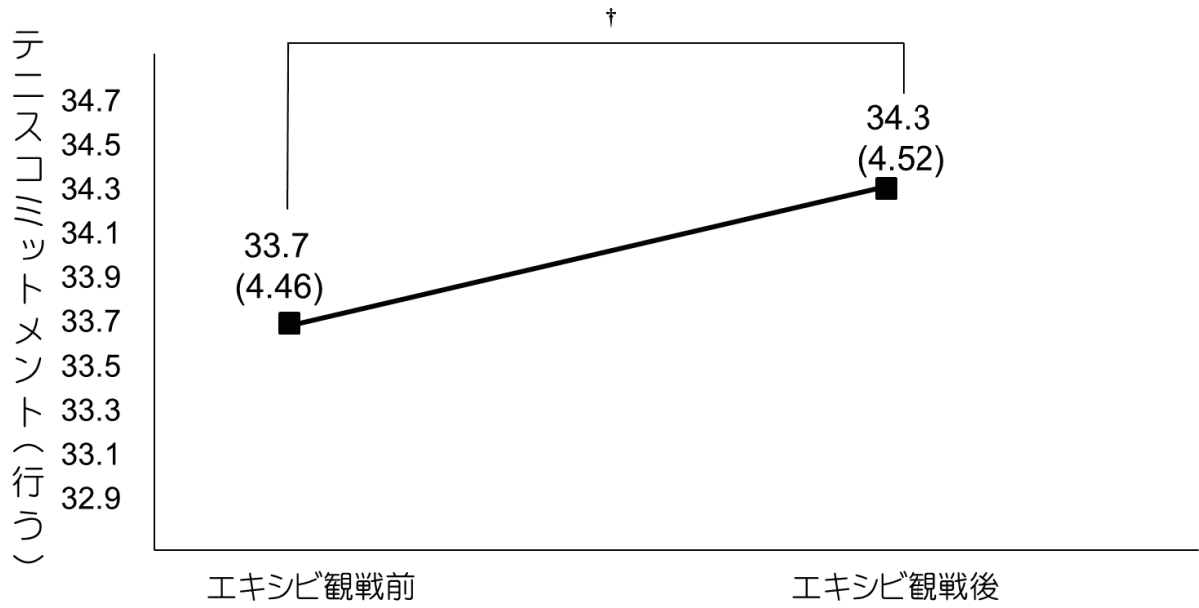
有効サンプルに対し、石村・石村(1997)を参考に、観戦前・観戦後において、対応のある一元配置分散分析を行った(表9)。なお、統計的有意水準は全て5%とし、統計的有意確率が5%から10%であったものについては統計的有意傾向があったとした。

表9 観戦前後の平均値と分散分析結果

	観戦前		観戦後		分散分析 (F値)
	Mean	SD	Mean	SD	
テニスコミットメント(行う)	33.7	4.46	34.3	4.52	3.17 †
テニスコミットメント(観る)	26.4	6.79	28.6	6.00	15.94 **
あこがれ	15.9	3.45	16.8	3.09	6.56 *
テニスをするのが好き	6.6	.611	6.5	.676	1.96
テニスを観ることが好き	5.6	1.41	5.9	1.00	4.96 *
テニスをするのは楽しい	6.4	.805	6.4	.700	.065
テニスを観ることは楽しい	5.8	1.30	6.0	1.15	4.46 *
テニスをするのが得意	4.2	1.48	4.4	1.36	3.27 †
テニス観戦に詳しい	3.6	1.69	3.8	1.66	3.43 †

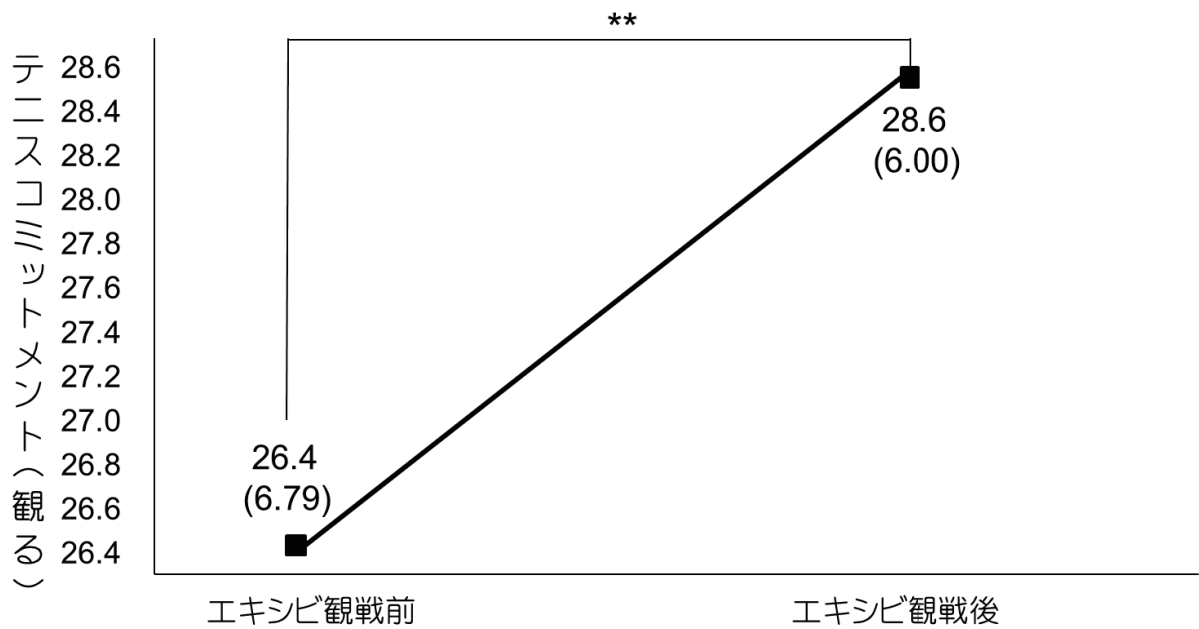
** p<0.01 * p<0.05 †p<0.1

まず、表9と、図8、図9、図10に示したように、テニスコミットメント(行う)に関しては、観戦前と観戦後において10%水準の有意傾向が確認され(F=3.17, p<0.1)、テニスコミットメント(観る)は、観戦前と観戦後において有意差が見られた(F=15.94, p<0.01)。そして、「あこがれ」に関しても、観戦前に比べ観戦後の方が有意な向上を示した(F=6.56, p<0.05)。



図中の数値は平均値 ()内の数値は標準偏差 ** P< 0.01 * P< 0.05 † P< 0.1

図8 テニスコミットメント（行う）の変化



図中の数値は平均値 ()内の数値は標準偏差 ** P< 0.01 * P< 0.05 † P< 0.1

図9 テニスコミットメント（観る）の変化

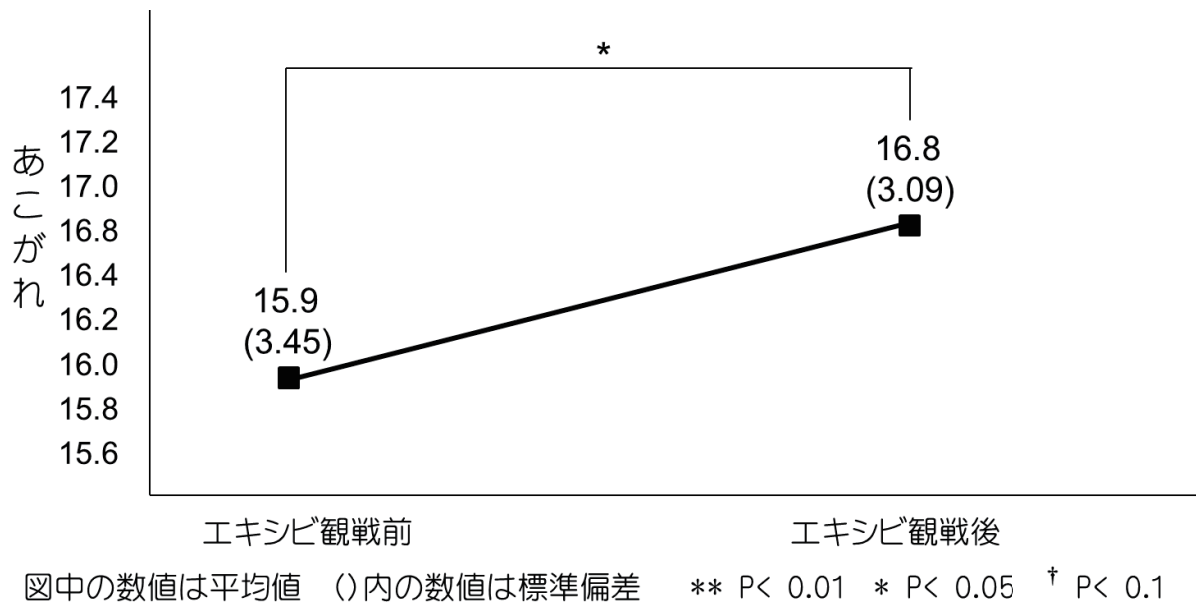
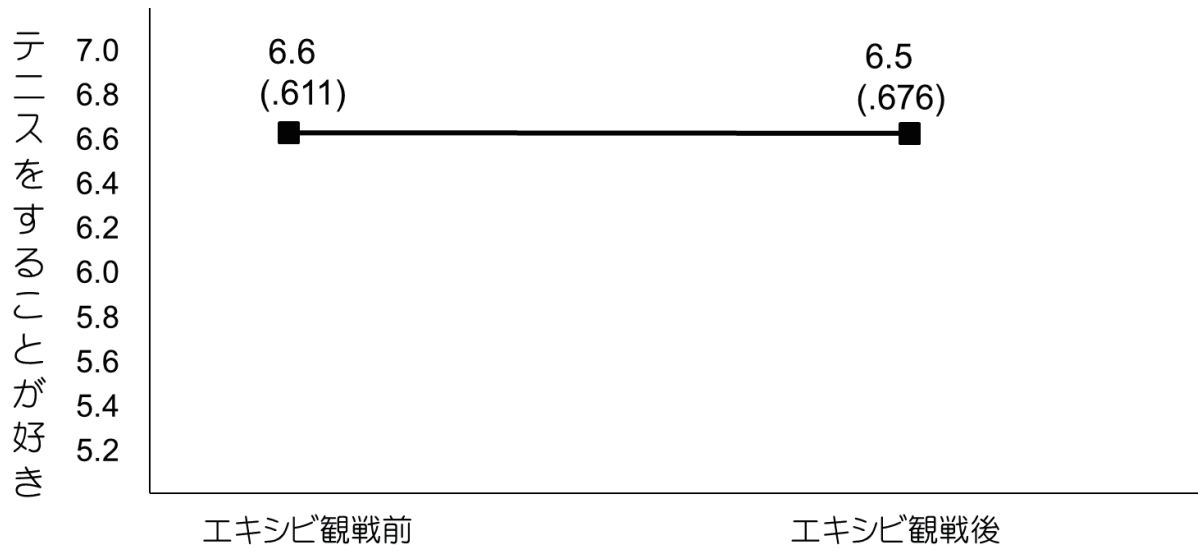


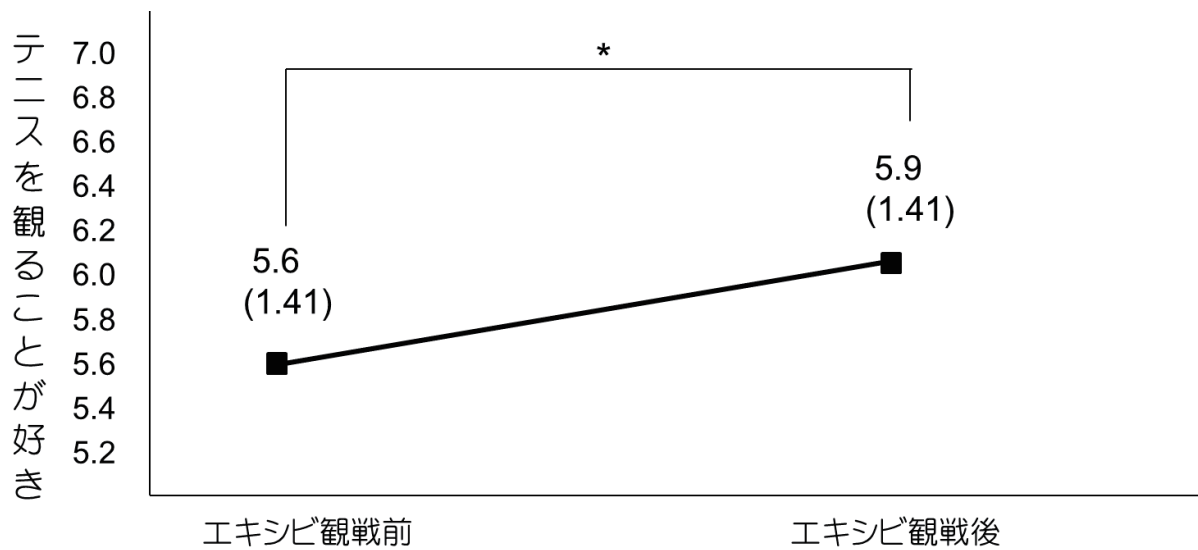
図10 「あこがれ」の変化

一方、テニスに対する態度に関しては、表9と図11から16に示したように、「テニスをするのが好き」、「テニスをするのは楽しい」には観戦前後で統計的有意性は確認されなかったが、「テニスを観ることが好き」、「テニスを観ることは楽しい」には、観戦前後で5%水準の有意差が見られた ($F=4.96, p<0.05$ 、 $F=4.46, p<0.05$)。それに対し、「テニスをするのが得意である」の項目は観戦前後で、10%水準の有意傾向が見られ ($F=3.27, p<0.1$)、「テニス観戦に詳しい」の項目にも、観戦前後で10%水準の有意傾向が確認された ($F=3.43, p<0.1$)。



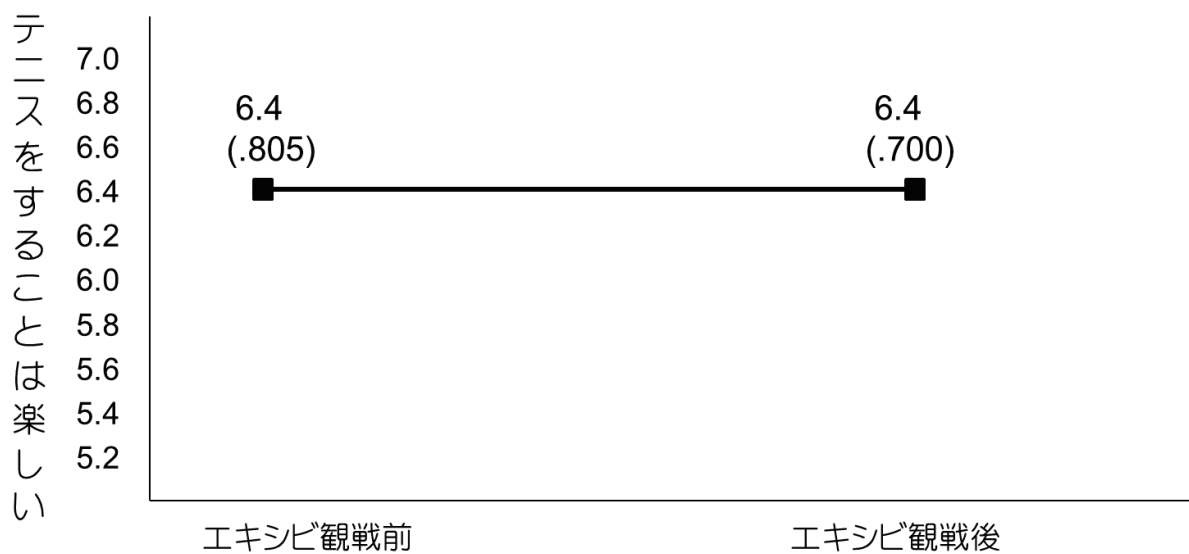
図中の数値は平均値 ()内の数値は標準偏差 ** P< 0.01 * P< 0.05 † P< 0.1

図1 1 テニスへの態度 (テニスをすることが好き) の変化



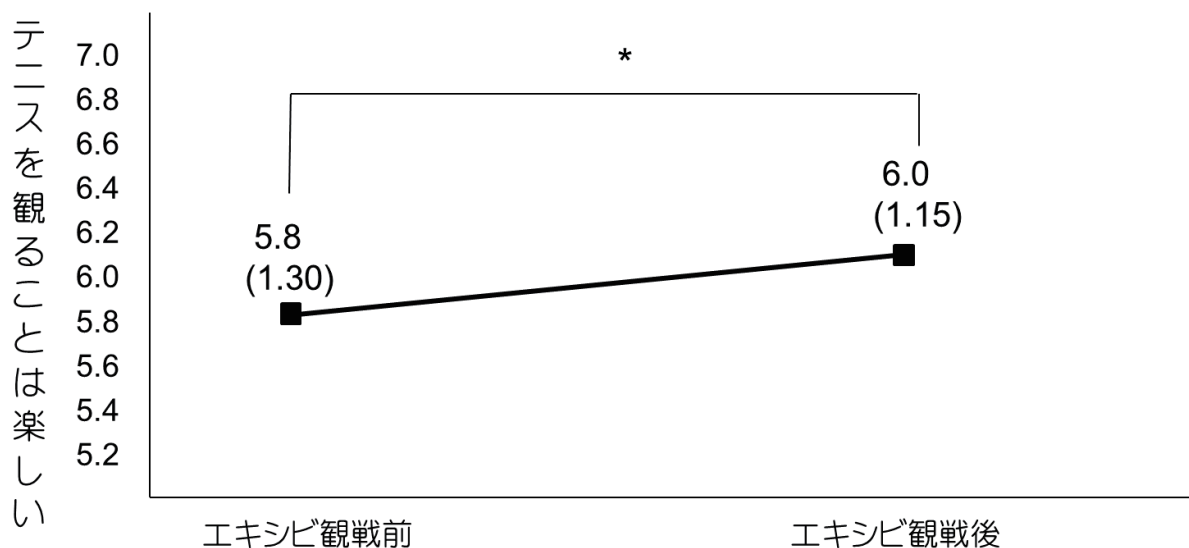
図中の数値は平均値 ()内の数値は標準偏差 ** P< 0.01 * P< 0.05 † P< 0.1

図1 2 テニスへの態度 (テニスを観ることが好き) の変化



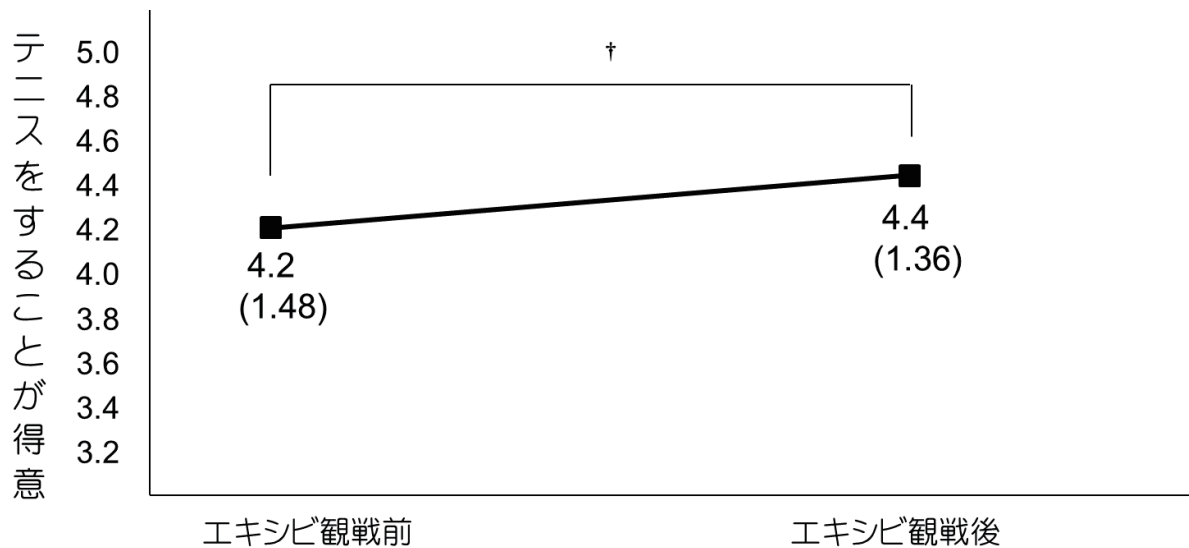
図中の数値は平均値 ()内の数値は標準偏差 ** P< 0.01 * P< 0.05 † P< 0.1

図13 テニスへの態度 (テニスをすることは楽しい) の変化



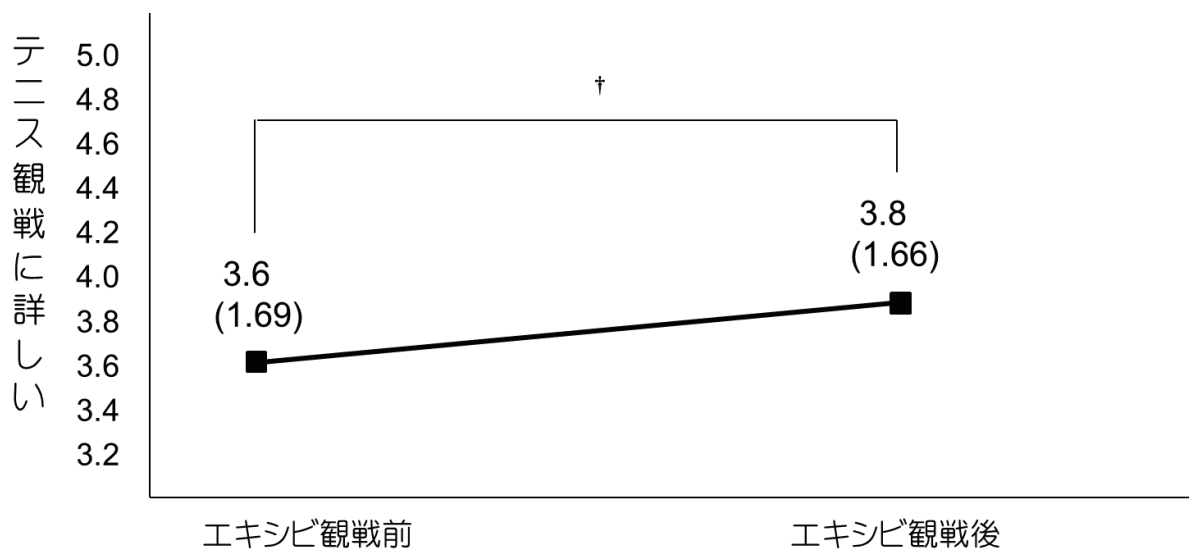
図中の数値は平均値 ()内の数値は標準偏差 ** P< 0.01 * P< 0.05 † P< 0.1

図14 テニスへの態度 (テニスを観ることは楽しい) の変化



図中の数値は平均値 ()内の数値は標準偏差 ** P< 0.01 * P< 0.05 † P< 0.1

図15 テニスへの態度（テニスをすることが得意）の変化



図中の数値は平均値 ()内の数値は標準偏差 ** P< 0.01 * P< 0.05 † P< 0.1

図16 テニスへの態度（テニス観戦に詳しい）の変化

3. 3. 5 考察（研究2-2）

研究2-2では、テニスクラブにおけるテニス実施者に対し、観戦前・観戦後と質問紙調

査をすることで、エキシビ観戦がスクール生に与える影響について量的側面から検討を行うことを目的とし、再度エキシビを開催することで、観戦前後におけるデータを取得した。

有効サンプルの属性は、男女共にほぼ同数であり、レベルは初中級、中級、中上級が多く、初級や上級の層は比較的少なかった。また、50名のうち大部分が、コーチ A、B、C が担当するレッスンのいずれかを受講していた。また、コーチ A、コーチ B のレッスンを受けたことがない者はほとんどおらず、コーチ C のレッスンを受けたことがない者も全体の約 30%程度であった。一方で、コーチ E は担当レッスンをまだ持っていなかったこともあり、コーチ E のレッスンを受けたことのある観戦者は存在しなかった。

有効サンプルに対し、観戦前・観戦後において、対応のある一元配置分散分析を行った結果、テニスコミットメント(観る)に関しては、観戦前と観戦後において 1%水準での向上が見られた($F=15.94$, $p<0.01$)。この結果から、エキシビ観戦によってテニス実施者のテニス観戦へのモチベーションが向上する可能性が示された。一方、テニスコミットメント(行う)に関しては、観戦前と観戦後において統計的有意差は見られなかった。しかし、10%水準での向上が見られたことや($F=3.17$, $p<0.1$)、研究 2 - 1 においても、テニス実施に対するモチベーションの向上を示唆する結果が得られたことから、エキシビ観戦によってテニス実施者のテニスに対する意欲が向上する可能性は十分に考えられる。しかし、テニスコミットメント(観る)の平均値は、観戦前後で大きく変化しているのに対し、テニスコミットメント(行う)の平均値の変化はそこまで大きくはなかったことから、エキシビ観戦はテニス観戦への意欲の向上に対しては非常に効果的であるが、テニス実施への意欲の向上に対しては、一定の効果は期待されるものの、観戦への意欲向上に比べると影響は小さい可能性が考えられる。ただし、テ

テニスコミットメント(行う)に関しては最高値が 42 であるのに対し、平均値は 33.7 であり、テニスコミットメント(観る)と比べてもかなり大きな値となっている。このことから、テニスコミットメント(行う)がテニスコミットメント(観る)に比べ、向上が小さかった原因になっている可能性も考えられる。

「あこがれ」に関しては、観戦前に比べ観戦後の方が高い値を示し ($F=6.56, p<0.05$)、このことから、エキシビで、普段テニスを習っているコーチの試合を観ることで、コーチへのあこがれ(尊敬)がより高まったことが考えられる。青木・中島(2011)による指摘と、テニスコミットメントの向上を踏まえて検討すると、あこがれが向上したことにより、テニスへのモチベーションが向上した可能性は高いと考えられる。

また、テニスへの態度に関しては、「テニスをするのが好き」、「テニスをするのは楽しい」には観戦前後で統計的有意性は確認されなかったが、「テニスを観るのが好き」、「テニスを観ることは楽しい」には有意な向上が見られた ($F=4.96, p<0.05$ 、 $F=4.46, p<0.05$)。エキシビ観戦によって、テニスをするのが好きになったり、楽しみを感じるようになったりする可能性は低いですが、テニスを観ることに対しての態度は大きく変容することが示唆された。一方、「テニスをするのが得意」において、統計的有意傾向が確認された。テニスコミットメント同様、観戦に比べるとその平均値の変化量は小さいものの、エキシビの観戦がテニス実施に対しても、ある程度の影響力は持っている可能性が明らかとなった。なお、テニスへの態度において、「テニスをするのが好き」の平均値は 6.6 であり、「テニスをするのは楽しい」の平均値は 6.4 であった(最高値は 7)。テニスコミットメント(する)同様に、このことが、エキシビ観戦による変化が小さかった原因である可能性も考えられる。

3. 4 結論（研究2）

研究2では、民間テニスクラブにおけるテニススクール生の競技観戦プログラムへの参加が、テニスへの参加にどのような影響を及ぼすのか実証的に検証した。本研究は、東京都のTテニスクラブを事例にして行われたが、本研究で得られた知見は、全国各地に存在する他のテニスクラブ等に対しても応用可能なものと考えられる。よって、上記のことを踏まえて今後研究は継続されていく必要がある。

今回のエキシビは、いずれも接戦であり、観戦満足度等も非常に高かったことから、スクール生に良い影響を与えやすいゲーム内容であったことが窺える。試合内容が一方的な展開になってしまったり、コーチ（指導者）が観戦者の期待に応えるような良いパフォーマンスを全く発揮できなかつたりした場合、本研究の結果がどのように変化するかといった点は興味深く、場合によっては、エキシビのスコアやゲーム展開を意図的に統制することが効果的であるか否かといった議論が生じることも予想される。このような点も踏まえて、今後研究は継続される必要がある。

いずれにせよ、今回得られた知見を他の民間スポーツクラブ等に応用する場合、研究2-1のインタビューデータからも再三に渡り確認されたように、コーチや指導者が日頃言っていることが実際に体現できるかどうか、エキシビの開催が有意義なものになるかどうかの分岐点になるのではないかと考えられる。エキシビを行う上で、コーチや指導者にとっては、指導内容がスクール生にとって机上の空論となってしまうような、日頃からの鍛錬が必須であると言えよう。

第4章 総合論議

4.1 クラブマネジメントへのインプリケーション

研究1、2から、民間テニスクラブにおける、競技会への参加とエキシビ観戦が、テニススクール生に及ぼす影響を明らかにした。まず、競技会への参加に関しては、テニススクール生の実施頻度や継続意図の向上に貢献することが明らかとなり、競技会を有効に活用することで、テニススクール生のレッスン受講回数の向上や、退会率の減少に貢献できる可能性がある。また、競技会そのものにおいてもエントリーフィーによる収益を得られるという点で、マネジメントする側にとって有益なプログラムになり得ると言え、民間テニスクラブにおいても、様々なテニス実施者が参加できるような大会を定期的に行うことが肝要かと思われる。

今回対象とした東京都S区の区民大会は、Tテニスクラブの初級～中級クラスの生徒を、大会における初級～中級レベルのカテゴリーに出場させたにも関わらず、勝利できたものが殆ど存在しなかった。このことから、テニス競技会への参加は、多くのスクール生にとって、技術レベルという側面において、かなり敷居の高いプログラムであることが窺える。競技会を介して、初級者のテニスの継続化や実施頻度の向上を目指すのであれば、初級者であっても、それなりに楽しめるような競技会を数多く開催することが必須であると言えよう。例えば、初級～中級レベルの下に「入門レベル」といったカテゴリーを作ったり、テニススクールのレベル別でトーナメントやリーグ戦を開催したりするなど、初級者であっても積極的に競技会へ参加できるような企画を行うことが肝要と言えよう。

さらに、「競技会で良い結果を残した参加者は、テニススクールにおいて上のレベルに進級できる」などといった、何らかのインセンティブを付与することで、スクール生のモチベーションをさらに向上させることができる可能性も考えられるため、このような点に留意した上で、競技プログラムをクラブマネジメントに活用することが望ましいと言える。

一方で、エキシビ観戦に関しては、今回の研究で実施・観戦への意欲の向上に及ぼす効果が検証されたが、研究2-1で明らかになったように、コーチへの尊敬を高めたり、心理的距離を縮めたりするといった点においても、クラブマネジメントにとって有効なプログラムになり得ると言える。また、プロモーションにおいて大きなコストをかけなくても一定の観戦者を集めることができる可能性が高いという点からも、エキシビ観戦の後に、レッスンプログラム等を開催したり、エキシビ観戦プログラムをクラブのイベントとしてより充実させ観戦料金を徴収したりする戦略も有効であると言えよう。また、競技会とエキシビ観戦を組み合わせたプログラムを開催することも効果的であると考えられる。

今回の研究で提案した競技会への参加、エキシビ観戦プログラムは、マネジメントを行う側の努力次第で、いつでも開催できるという点で、適用可能性は高く、テニススクール生の意欲を高める上で有効なプログラムであると考えられる。さらに、前述したようにプログラムをバージョンアップさせていくことで、更に効果が得られる可能性も期待できる。

こういったことから、研究1、研究2の結論部分でも触れたように、競技会やエキシビの内容と、それに対するプログラム参加者の評価にまで踏み込んで検討を行うことで、これらのプログラムから得られる恩恵を最大化する方法を明らかにしていくことが重要であると言えよう。本研究で行われたようなプログラムを様々なバリエーションで行うことは、競技会

やエキシビの内容の違いがどのような変化を生むのかといった理解への手がかりになるものと考えられ、そういった点からも、今後の研究の継続が期待される。

また、今回の結果から、クラブ内部で大会やエキシビを行うだけでなく、例えば、地域で行われている区民大会にスクール全体として参加をしたり、ジャパンオープンなどのトッププロの試合にテニスクラブ全体として観戦に行ったりすることも、テニススクール生の実施、継続への意欲を高める上で重要になると考えられる。そのためには、クラブの経営者や、クラブに所属しているスタッフが、テニスクラブ外部で行われている競技会や、トッププロが出場するトーナメントの情報に精通し、またそういった情報の入手により敏感になっておく必要があると言えよう。すなわち、テニスクラブ内部だけでなく外部にも目を向けておくといった姿勢が、今後のテニスクラブマネジメントにおいては重要になってくると考えられる。

なお、本研究においては、競技会参加やエキシビ観戦の効果がどの程度持続性があるかについてまでは踏み込んでいないが、時間の経過と共に、これらのプログラムで得られた効果は徐々に失われていく可能性も十分に考えられる。よって、このようなプログラムをテニスクラブにおいて、単発的なイベントとしてではなく、定期的実施していくことがクラブマネジメントにとって肝要であると言えよう。

4. 2 本研究の学術的な成果

第1部において述べたように、民間スポーツクラブのマネジメントに関する研究においては、戦略的に顧客のスポーツ実施や継続への意欲を高めることができるような介入プログラ

ムに関する研究が求められており、特にそれを縦断的な調査によって行ったものは先行研究において見られなかった。本研究においては、縦断的調査によって、顧客のスポーツ実施や継続への意欲を高めるプログラムについての検討を行ったという点において、民間スポーツクラブのマネジメントに関する研究分野に対し、一定の貢献をしたといえよう。

今回対象とした競技会参加プログラムとエキシビ観戦プログラムは、どちらも「競技」に関するプログラムである。八代・中村(2002)も、「スポーツはその本質において競争を含んだ活動」と述べていることから、競技はスポーツの本質的な部分であり、その競技的な面白さに触れることが、テニススクールの生徒にとって大きな影響を及ぼしたという可能性が考えられる。

競技プログラムへの参加は、「競技をする」ことであり、観戦プログラムへの参加は「競技を観る」ことであるが、本研究で得られた、各々がもたらす影響をまとめたものを以下の図8に示した。

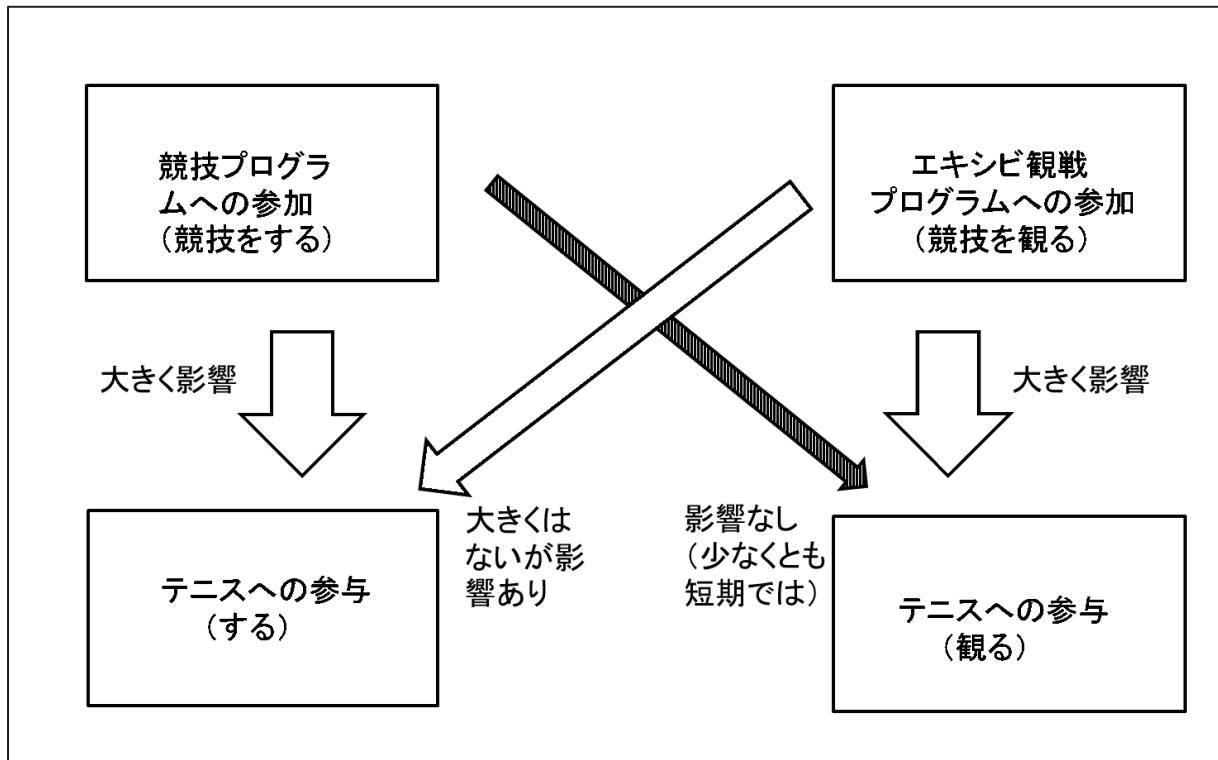


図17 競技会参加・エキシビ観戦プログラムが与える影響のまとめ

この図からもわかるように、「競技をするプログラム」は「する」への影響が強く、「競技を観るプログラム」は「観る」への影響が強いということが理解できる。一方で、「競技をするプログラム」が「観る」に与える影響は、少なくとも本研究においては確認されなかった。しかし、「競技を観るプログラム」が「する」に影響を及ぼす可能性は確認され、このことは、スポーツマネジメントの研究領域に一定の知見を提供したと見なすことが可能であろう。

4. 3 研究の限界と今後の課題

4. 3. 1 研究の限界

本研究の限界としては、競技会やエキシビの内容を統制することが不可能であったという点と、サンプルサイズの点が主要なものとして挙げられる。

まず、内容の統制についてであるが、今回の研究における区民大会やエキシビに関しては、それらの内容がどういったものになるのか、あらかじめ統制をすることは不可能であった。競技会参加にせよ競技観戦にせよ、それらの内容がどのようなものであったのかによって、参加者に及ぼす影響は異なる可能性が高いと考えられるが、その部分による差異を検討できなかったことが本研究の限界と言える。

一方で、サンプルサイズについてであるが、プログラムへの参加の影響を縦断的に調査するという本研究にフレームにおいては、横断的な研究におけるような、大規模なサンプルを取得し分析を行うことは困難であり、その点も研究の限界として挙げられる。

4. 3. 2 今後の課題

今後の研究課題としては、まず、プログラム内容の差異が、参加者に与える影響の変化について検討する必要がある。特に、競技会やエキシビが、一方的なスコアになった場合と接戦になった場合の違いについては、クラブマネジメントへの適用を考える上で重要な知見になるといえよう。これを明らかにするためには、今回行った研究を継続的に行い、様々なバリエーションの研究結果を蓄積していくことが有効であると考えられる。

そして、競技会参加や競技観戦プログラムの効果がどの程度持続するものなのかといった

部分に対する検討も必要になると言える。この検討を行うためには、例えばプログラム終了後の1ヶ月後や2ヶ月後において、プログラム参加者に追跡調査を行い、かつプログラムに参加しなかったものも統制群として設定した上で、統計的な比較を行ったり、もしくはインタビュー調査や参与観察といった質的な方法でアプローチを行ったりすることも有効であろう。今回提案したプログラムが、どの程度持続可能性があるのか明らかにすることで、プログラムのクラブマネジメントへの適用可能性やその有用性は更に高まるものと考えられ、今後の研究が期待されると言える。

注

(注1) 東京都S区において、区民大会は年2度開催され(春・秋)、春は個人戦、秋は団体戦が行われる。秋の団体戦では、上級者を対象とした「男子A」・「女子A」と、初級から中級者を対象とした「男子B」・「女子B」という4つのカテゴリーが存在する。団体戦は、シングルス1本、ダブルス2本の中で、2本を先取したチームが次のラウンドに駒を進めるといった形式で行われ、いずれのカテゴリーにおいても3位までの入賞チームには表彰があり、入賞チームにはメダルや賞状などが授与される。今回の研究において、調査対象者がエントリーしたのは、「男子B」・「女子B」であった。

(注2) 本研究では2.3でも述べているように、研究方法において、大学のバドミントン選手へ試合1時間前にモチベーションビデオを見せることがセルフエフィカシーや競技パフォーマンス等を与える影響について検討した山崎・杉山(2009)を参考にした。山崎・杉山(2009)

では、調査対象となるサンプル数が介入群において 10 であり、本研究でもそのサンプル数を 1 つの目安とした。しかし、本研究においては調査対象者から、3 度に渡って質問紙調査における有効回答を得る必要があるというサンプリングにおけるリスクが存在し、サンプルサイズが大幅に減少する可能性もあったことから、目標サンプル数を 30 と設定した。

(注 3) 本研究では緒言でも述べたように、プログラムの効果を検討した様々な研究を先行研究としてレビューしているが、これらの研究において、従属変数となるデータを測定するタイミングについて、基準やその根拠について明確に述べているものは存在しておらず、またそのタイミングも研究によって大きく異なっていた。本研究では、「競技会への参加申し込みから競技会当日までの変化」、並びに「競技会を行うことによる変化」の検討を研究の枠組みとしており、競技会への申し込み締め切り日が女子の競技会開催日の 1 ヶ月前であったことから、調査のタイミングを試験的に、競技会 1 ヶ月前・競技会直前・競技会後の 3 度に渡って調査を行うものとした。

(注 4) 本研究においては、統計的有意水準を 5% に設定しているが、統計的有意確率が 5% から 10% のものについては、統計的有意傾向があるものとして論を進めている。スポーツマネジメントの研究領域において、統計的有意確率が 5%~10% であるものを統計的有意傾向があるとして論を展開している研究はあまり見られないが、教育や心理学の領域においては、統計的有意確率が 5%~10% であったものを統計的有意傾向があるとして論を展開している査読付き論文も散見される。(小方, 1998; 武田・原, 2000; 森野, 2005; 清水ら, 2010)。こ

これらの論文における共通点としては、研究デザインから生じる様々な制約や研究の限界から、分析の対象となるサンプルサイズがあまり大きくはないといったことが挙げられる。本研究においても、サンプルサイズは決して大きいとは言えないものの、研究デザインを考える上で、その部分は研究の限界として位置づけられるものであった。よって、研究結果に対しより詳細な検討を行う上で、統計的有意確率が5%~10%であったものについても、統計的有意傾向があるものと解釈し、考察の対象とするものとした。

参考文献

- 1) 青木多寿子・中島恭兵；児童・生徒の向上心、目標志向性に及ぼす“あこがれ”の影響，
学習開発学研究 Vol.4, pp.67-73, 2011.
- 2) Ajzen, I. and Driver, B.L.; Application of the theory of planned behavior to leisure
choice, Journal of Leisure Research, Vol.24, pp.207-224, 1992.
- 3) Ames, C.; Achievement goals, motivational climate and motivational processes. In:
Roberts, G. C. (Ed.) , Motivation in sport and exercise, Human Kinetics, pp.161-176,
1992.
- 4) 催鐘彌・柳沢和雄；フィットネスクラブのサービス品質が顧客満足に及ぼす影響，体育・
スポーツ経営学研究, Vol.17, No.1, pp.1-17, 2002.
- 5) 醍醐笑部；スポーツ鑑賞における解説内容の違いが態度・行動意図に与える影響：大学
バレエクラスを題材に，早稲田大学大学院 2010 年度修士論文, 2011.
- 6) Dweck, C. S.; Motivational processes affecting learning, American Psychologist ,

Vol.41, pp.1040-1049, 1986.

- 7) Fishbein, M. and Ajzen, I.; Belief, attitude, intension, and behavior : An introduction to theory and research, Reading MA, Addition-Wesley, 1975.
- 8) 深山元良 ; 体育・スポーツにおける動機づけ研究の展望, 城西国際大学紀要, Vol.21, No.2, pp.127-143, 2013.
- 9) Hall, H. K. and Kerr, A. W. 中島, 宣行 (監訳) ; スポーツと身体活動における目標設定モチベーション理論の新展開 : スポーツ科学からのアプローチ, 創成社, 2001.
- 10) 橋爪可織ら ; 連想法による成人看護学実習に向けた学習支援プログラム (サマーセミナー) の評価 : 事例による看護過程の展開と看護技術演習の実施, 保健学研究, Vol.22, No.2, pp.17-25, 2010.
- 11) 林直也ら ; 「W 杯の観戦が日本と韓国における中学生のサッカー行動へ与える影響に関する研究 : 「みる」スポーツと「する」スポーツの関連に着目して, 大阪体育大学紀要, Vol.35, pp.1-13, 2004.
- 12) 堀百合子・清水房枝 ; 血液センター看護師の就業継続の要因について, 三重看護学誌, Vol.13, pp.41-51, 2011.
- 13) 石村貞夫・石村光資郎 ; SPSS による分散分析と多重比較の手順, 東京図書, 1997.
- 14) 上淵寿 ; 動機づけ研究の最前線, 北大路書房, 2004.
- 15) 鹿毛雅治 ; モティベーションをまなぶ 12 の理論, 金剛出版, 2012.
- 16) 金崎良三ら ; スポーツ行動の継続化とその要因に関する研究(1) : 婦人テニス教室参加者の場合, 健康科学, Vol.11, pp.71-85, 1989.

- 17) 川喜田二郎 ; 発想法 : 創造性開発のために, 中央公論新社, 1967.
- 18) 菊池せつ子 ; 学力も学習意欲も低い学生向けのレッスンプラン : 健康生活学科・英語教育におけるモチベーションを高めるための「異文化交流会」プログラム, 武蔵丘短期大学 紀要, Vol.16, pp.53-60, 2009.
- 19) 木村和彦・大鋸順 ; フィットネスクラブ従業員の職務特性と職務満足に関する研究, スポーツ産業学研究, Vol.5, No.1, pp.1-11, 1995.
- 20) 北見由奈ら ; 児童を対象としたハッピークラスプログラム (対人関係能力促進支援) の検討 : プログラム実施前後の比較, 心理学研究(健康心理学専攻・臨床心理学専攻), Vol.1, pp.10-19, 2011.
- 21) Locke, E. A.; Toward a theory of task motivation and incentives, *Organizational Behavior and Human Performance* , Vol.3, pp.157-189, 1968.
- 22) Mark A. McDonald, et al.; Motivational Factors for Evaluating sport spectator and participant Markets, *Sports marketing Quarterly*, Vol.11, No.2, pp.100-113, 2002.
- 23) 宮地弘太郎 ; テニスのサービスゲームに関する研究 : ユニバーシアード・ベオグラード大会から, 関西国際大学研究紀要, Vol.11, pp.247-251, 2010.
- 24) 三宅基子 ; レジャー・マーケットの将来, レジャー・レクリエーション研究所 *News Letter* Vol.4, No.23, pp.2-3, 1990.
- 25) 宮本美沙子・奈須正裕 ; 達成動機の理論と展開 : 続・達成動機の心理学, 金子書房, 1995.
- 26) 森野美央 ; 幼児期における心の理論発達の個人差、感情理解発達の個人差、及び仲間と

- の相互作用の関連, 発達心理学研究, Vol.16, No.1, pp.36-45, 2005.
- 27) 永田靖・吉田道弘 ; 統計的多重比較法の基礎, サイエンティスト社, 1997.
- 28) 中路恭平・築瀬歩 ; フィットネスクラブにおける顧客満足測定尺度の比較とその適用法に関する研究, スポーツ産業学研究, Vol.8, No.2, pp.1-17, 1998.
- 29) 中路恭平 ; フィットネスクラブにおける会員の顧客満足と会員継続に関する縦断的事例分析, 体育・スポーツ経営学研究, Vol.20, No.1, pp.1-15, 2006.
- 30) 中西純司 ; 民間スポーツ・フィットネスクラブ経営における顧客苦情マネジメント分析, 体育・スポーツ経営学研究, Vol.24, pp.1-23, 2010.
- 31) Nicholls, J. G.: Achievement motivation : Conception of ability, subjective experience, task choice, and performance, Psychological Review Vol.91, pp.328-346, 1984.
- 32) 日本体育施設協会 ; 月刊体育施設 4月号, Vol.417, 体育施設出版, 2004.
- 33) 日本テニス協会 ; 2012 年度特別事業テニス人口等環境実態調査報告書, 日本テニス協会, 2013.
- 34) 岡本佐智子ら ; マラソン大会開催地域の自主サークル参加者によるマラソン継続の要因, 日本健康教育学会誌, Vol.18, No.4, pp.278-288, 2010.
- 35) 小方(川嶋) 涼子 ; 課題達成場面における目標志向性とパフォーマンスとの関係, 教育心理学研究, Vol.46, No.4, pp.387-394, 1998.
- 36) 大西孝之・原田宗彦 ; プロスポーツチームが行う地域貢献活動の消費者に与える影響 : 大学生のチーム・アイデンティフィケーションと観戦意図の変化に注目して, スポーツ科学研究, Vol.5, pp.253-268, 2008.

- 37) 押見大地・原田宗彦 ; スポーツ観戦における感動場面尺度, スポーツマネジメント研究, Vol.2, No.2, pp.163-178, 2010.
- 38) 小塩真司 ; SPSS と AMOS による心理・調査データ解析 : 因子分析・共分散構造分析まで, 東京図書, 2004.
- 39) Riddle, P.K.; Attitudes, beliefs, behavioral intentions, and behaviors of women and men toward regular Jogging, Research Quarterly for Exercise and Sport, Vol.51, No.4, pp.663-674,1980.
- 40) 佐野昌行 ; 国際スポーツイベント観戦者の基礎的特性に関する研究, 日本体育大学紀要, Vol.36, No.2, pp.231-248, 2007.
- 41) 笹川スポーツ財団 ; スポーツ白書 : スポーツが目指すべき未来, 笹川スポーツ財団, 2011.
- 42) Scanlan, T.K., et al.; The Sport Commitment Model : Measurement development for the youth-sports domain, Journal of Sport and Exercise Psychology, Vol.15, pp.16-38, 1993.
- 43) 清水安夫ら ; 大学体育における野外教育活動の可能性の検討 : プロジェクトアドヴェンチャー・プログラムを導入したキャンプ活動におけるリーダーシップ及びフォロワーシップの養成, 大学体育学, Vol.7, No.1, pp.25-39, 2010.
- 44) 霜島広樹 ; 参加動機が観戦意図に与える影響に関する研究 : テニスを事例として, 早稲田大学大学院 2010 年度修士論文, 2011.
- 45) 霜島広樹・木村和彦 ; テニス参加者の観戦阻害要因に関する研究 : 国内2大プロトー

- ナメントに着目して, スポーツ産業学研究, Vol.22, No.2, pp.311-321, 2012.
- 46) 霜島広樹・木村和彦 ; 参加動機が観戦意図に与える影響に関する検討 : テニスを事例にして, スポーツ科学研究, Vol.10, pp.12-25, 2013.
- 47) 新出昌明 ; 商業スポーツ指導者の職務満足を構成する要因に関する研究, 体育・スポーツ経営学研究, Vol.12, No.1, pp.33-41, 1996.
- 48) Smith, R.H.; Assimilative and contrastive emotional reactions to upward social comparison. In J. Suls & Wheeler(Eds.), “Handbook of social comparison : Theory and research”, Kluwer Academic/Plenum Publishers, pp.173-200, 2000.
- 49) 高橋美砂子・橋本由利子 ; 介護通所施設利用者における口腔機能低下予防体操の効果(4) : 介入プログラム終了後の利用者と職員への意識調査から, 北関東医学, Vol.61, No.4, pp.543-548, 2011.
- 50) 武田鉄郎・原仁 ; 不登校の経験をもつ慢性疾患児(中学生)のストレス対処特性, 特殊教育研究, Vol.38, No.3, pp.1-10, 2000.
- 51) Tokuyama Sagatomo.; Examining different characteristics in consumer motivation for participant sport and spectator sport, Doctoral Thesis, College of Education and Human Development University of Louisville, 2009.
- 52) 富山浩三ら ; 商業スポーツクラブ会員の行動特性 : 活動参加頻度と心理的なクラブ評価, 体育学研究, Vol.41, No.6, pp.474-483, 1997.
- 53) 山崎将幸・杉山佳生 ; バドミントン選手におけるモチベーションビデオの介入効果 : 試合1時間前視聴タイミングからの検討, スポーツパフォーマンス研究, Vol.1, pp.275-288,

2009.

- 54) 築瀬歩ら；学校体育経営におけるプログラムサービスの有効性に関する研究：総合運動プログラムをめぐる運動者行動の分析, 体育・スポーツ経営学研究, Vol. 5, No.1, 19-29,

1988.

- 55) 八代勉・中村平；体育・スポーツ経営学講義, 大修館書店, pp.85-88, 2002.

謝辞

博士論文執筆にあたり、まず、主査であるトンプソン先生に御礼申し上げます。博士課程入学の際に先生は、ご自身が専門とされるスポーツ社会学と異なった分野を専門とする私を快く受け入れて下さり、3年間を通じて丁寧にご指導を行って下さいました。また、母国語である英語はもちろん、日本語も非常に堪能であられる先生のゼミには、様々な国籍の学生が集まり、私に新たな視点を与えてくれるきっかけになったと思います。

そして、副査を引き受けて下さった、木村先生、作野先生、松岡先生にも御礼申し上げます。木村先生は修士、博士と合わせて5年間お世話になり、公私ともに懇意にさせて頂きました。先生からは、「スポーツに対する情熱」を常に感じとることができ、そんな木村先生のゼミは、同じようにテニスに情熱を持っていた私にとっては、とても居心地が良いものでした。先生のゼミには、同じようにスポーツに対し情熱を持った多くの学生が集まり、彼らとは公私ともに充実した時間を過ごすことが出来ました。さらに、修士1年生の頃から、木村先生が学会で発表する機会を積極的に与えて下さったことから、博士課程に入ってから臆することなく学会発表や論文投稿を行うことができ、研究者としての素地が形成されたように思います。

作野先生は、木村先生と大学院ゼミを合同で行っていたこともあり、様々なアドバイスを頂く機会に恵まれました。作野先生は人柄も素晴らしく、ゼミ以外でも色々のご相談に乗って頂きました。心より感謝申し上げます。

松岡先生は、本論文の査読において、多大なるご協力を頂きました。先生の的確なご指摘

や、研究に対する真摯な姿勢は、今後の研究活動においても参考になる部分が多く、研究者として今後是非見習わせて頂きたいと考えております。

また、修士の時からゼミに参加させて頂いていた武藤先生にも御礼申し上げます。武藤先生は、非常に独創的な視点を持っておられ、他の研究者が想定しないような観点から斬新なご指摘を下さる事が多々あり、いつも私に新しいものの見方、考え方を与えてくれました。ゼミの合間に、喫煙所にいらっしゃる先生と談笑する時間は、私にとって非常に有意義な時間でした。

そして最後に、私をサポートしてくれた家族と、テニスを通して知り合った仲間達にも御礼申し上げます。特に、コーチ生活を通して知り合った方々との関係は、私にとって宝であり、それが無ければ早稲田大学で博士の学位を取得する以前に、大学院に進学することすら絶対にあり得なかつたと確信しています。テニス業界が抱える様々な問題に悩みながらも、テニスに対する情熱を持ち、仲間を大切に、自らの目標達成に向け邁進する、そんな仲間がいたからこそ、研究者としてのモチベーションを維持し、博士論文執筆をやり遂げることができたのだと考えています。

末筆ながら、学部、大学院を通して私に関わって下さった全ての方に、この場を借りて改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。

2014年1月6日 霜島広樹